

2025 年
麻布大学
「ケージフリー採卵養鶏調査」
報告書

はじめに

世界鶏卵機関（World Egg Organization : WEO、2024 まで international egg commission）が 2024 年に発表した統計によれば、日本の非ケージ飼育羽数構成割合は 3.5%と前年の 5.9%より 2.4%低下した。

また動物擁護団体（Animal Rights Center）の調査（2023 年）では、日本におけるケージフリー比率は 1.1%程度と推計し、キューピーのホームページでも現状は 1%程度の認識（2024.10、推計値）を示した。

日本におけるケージフリー（Cage Free : CF）採卵養鶏の羽数構成比としては WEO のデータを用いるケースが少なくないが 2023 年発表（2022 年）の 5.9%から、2024 年発表（2023 年）の 3.5%への低下理由として、鳥インフルエンザの影響などで平飼い養鶏が縮小しているという見方をしめす専門家がいる。また農林水産省は 2024 年 6 月に『「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」に関する生産現場における取組状況について』「令和 5 年度に実施した試行調査の結果」で、アンケート回答者数から経営数の 21.1%が平飼い方式を採用しているとした。これを平飼い経営は「増えている」と判断する専門家がいる。

平飼い経営数は増えているのか減っているのか、平飼い養鶏羽数は増えているのか、減っているのか？

基本的数値に関し、専門家間で評価が定まっていないことは、大きな問題である。

日本におけるケージフリーの羽数構成比は、現行消費者ニーズを把握する上で不可欠のデータであり、今後の日本の採卵養鶏産業のあり方を検討し、適切な政策を示す上で基本となる。

また先の WEO データによれば日本は世界有数の 1 人当たり鶏卵消費国であることからシェア把握の意義は小さくない。

以上の問題意識から、把握可能な養鶏経営への質問紙を用いた調査により、ケージフリー経営の実態把握を試みたのが本調査である。

はじめに	-----	2
1 課題と方法	-----	4
1-1 課題と方法		
1-2 用語の定義		
1-3 回答数・捕捉率の検討		
2 飼養方法・飼育形態・鶏舎構造と羽数・経営数	-----	8
2-1 飼養方法別飼養羽数		
2-2 飼養形態別飼養羽数		
2-3 鶏舎構造別飼養羽数		
2-4 飼養方法別飼養スペース		
3 設置施設・品種・処置・開始年・開始理由・学んだ方法	-----	14
3-1 ケージ及びケージフリーの設置施設		
3-2 採卵鶏への処置（ビークトリミング、誘導換羽）		
3-3 ケージフリーの品種		
3-4 ケージフリー飼育の開始年		
3-5 ケージフリーを始めた理由		
3-6 ケージフリーの飼養方法を学んだ方法		
4 ケージフリー・採卵養鶏への考え方	-----	19
4-1 ケージフリーの技術的課題（自由回答、選択肢）		
4-2 ケージフリーの経営的課題（自由回答、選択肢）		
4-3 採卵養鶏のあり方（選択肢、自由回答）	-----	31
4-4 卵殻印字への意見（選択肢、自由回答）		
4-5 今後ケージフリーを増やしたいと思いませんか（選択肢、自由回答）	-----	44
4-6 ケージフリーに取り組む条件（自由回答）		
5 ケージフリーのメリット・デメリット	-----	56
5-1 ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答)		
5-2 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答)		
6 農畜産物販売金額、関連事業金額	-----	68
6-1 農畜産物販売金額		
6-2 関連事業販売金額		
6-3 農畜産物販売金額と関連事業販売金額の関係		
7 まとめと課題	-----	72
7-1 調査結果のまとめ		
7-2 調査結果から導かれる近未来予想		
7-3 残された課題		
謝辞	-----	76

1 課題と方法

1-1 課題と方法

令和6年(2024)畜産統計によれば、成鶏めす飼養羽数1,000羽以上の飼養者は1,640戸とされる。しかし「同一飼養者が市区町村をまたいで複数の飼養地(畜舎)を持っている場合、畜舎が所在する市区町村ごとに1飼養者」とすることから、大手企業は複数カウントされているケースがあり、実際の1000羽以上の経営数はこれより少ないと考えられる。

そこで、

- ①インターネット・新聞・雑誌等で紹介された採卵養鶏企業(2024年10月まで):鶏鳴新聞(2019年以降)、養鶏の友(2022年以降)、鶏卵肉情報(2014年以降)、鶏の研究(2018年以降)
- ②各種畜産認証を取得している経営:JGAP認証、農場HACCP認証、アニマルウェルフェア認証
- ③ケージフリー推進支援団体からの協力
- ④各県の養鶏協会のHP記載の養鶏経営リスト、CMやHP検索で把握可能な採卵鶏企業、等

以上で入手できた経営名称に基づき、インターネット等で住所検索等を行い、把握した691経営・農場の住所に対して、2025年2月にアンケート調査票を郵送した。その結果3月末までに147通(回収率21.2%)の回答を得て、このうち有効回答138票について集計分析を行った。

なお、回答対象は、成鶏飼養経営を対象とし、1経営体(企業)が複数飼養地(農場)を所有する場合、一つにまとめて回答を依頼した。そのさい、関連農場・提携農場における意思決定権が御社にある場合はそれら農場のデータも含めた回答を依頼した。

ただしアンケート票は、送付漏れを避けるために、明らかに重複している場合を除いて把握農場全てに送付した。

また、1つの経営体(企業)が複数部門の事業を営んでいることを想定し、6次産業化についても主として販売金額の質問を行った。

1-2 用語の定義

- ・飼養スペース等:cm²以外の単位で記入する場合は、坪などの単位も併せた記入を求めた。
- ・ケージフリーの定義:ケージ(バタリーケージ、エンリッチャブルケージ、エンリッチドケージ)以外は全てケージフリー(ケージで飼育していない)とした。

そのうえで以下のように分類し、それぞれの区分毎に集計した。

ケージフリーの分類:

- ・単層平飼い
- ・多段式平飼い(エイビアリー、コンビタイプ/ハイブリッドタイプのエイビアリー)
- ・放し飼い(フリーレンジ)
- ・有機(オーガニック)
- ・「屋根付飼育場」(ウインターガーデン、ベランダ等)は、「屋根なし飼育場」と同様に、「鶏舎外」として記載いただき、これらは「放し飼い」などに分類して整理した。

放牧育ち(パスチャー・レイズド)という用語は本調査では使用しないが、各経営で定義して使用している場合は、空所にその規定を記入いただき、記入ある場合はそれぞれ区分して集計した。

- ・本文中の記載・表現は、文脈に併せて以下のようにおこなった。

ケージのみの経営:ケージ経営、C経営

ケージフリーのみの経営：ケージフリー経営、CF 経営

ケージとケージフリー両方行う経営：並行経営、並行生産経営

1-3 回答数・捕捉率の検討

アンケート発送数 691 戸は、畜産統計（2024）の成鶏めす飼養の採卵養鶏農家 1640 戸中の 42.1% に上る。しかしながら、①網羅的・統計的手法でない点、②送付・回答票には畜産統計でカウントされていない成鶏 1000 羽未満経営がある（回収後に羽数が判明したため、何戸が 1000 羽未満であったかは不明）という課題がある。ただし本調査で回答いただいたケージフリー経営 74 戸は、2015 年畜産技術協会「採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書」における平飼い経営回答数 53 戸を上回り、農林水産省の 2024 年試行調査 63 戸を上回っていることから、ケージフリー調査として価値あるものと考えられる。

アンケート回収状況は、有効回答 138 票（回収数は 146 票、うち無記入、経営中止、などをのぞく）。

このうち、ケージ飼育のみの経営 64 戸（C 経営）、ケージフリー飼育のみの経営 53 戸（CF 経営）、ケージ飼育とケージフリー飼育の並行生産経営 21 戸（並行生産経営）であった。

1-3-1 農水省「令和 6 年度「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」の取組状況に係る調査との比較

現存する採卵鶏経営の分布等と比較して、回答票の代表性を検討した。

農林水産省「令和 6 年度「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」の取組状況に係る調査」採卵鶏の結果（詳細版）（2025. 6）と比較すると、以下のようである。

まず、飼養方法別の回答経営数は、回答数 408 と本調査より 270 経営多く 2.96 倍。

ケージ経営は 304 と本調査より 240 経営多く 4.75 倍。

ケージフリーのみの経営は 59 経営と本調査より 6 経営多く 1.11 倍

並行生産経営（農水省は併用と記載）は、45 経営と本調査より 24 経営多く 2.14 倍。

ケージフリー実施経営は合計 104 経営と本調査の 1.41 倍であった。

また、農水省調査は「1000 羽未満」を含み、「ヒナ・育成のみ」15 経営を含むため、その点は差し引いて比較しないとならない。

以上から、経営規模別回答状況を本調査と農水省調査（2025）比較して本調査は、①5～10 万羽未満層の構成比が低い、②1 万羽未満層の構成比が高い、という特徴がみられる。

表1 飼養方法別経営の構成比

	本調査		農水省調査(2025.6)	
	回答数	構成比	回答数	構成比
合計	138	100.0%	408	100.0%
ケージ飼育のみの経営	64	46.4%	304	74.5%
ケージフリー飼育のみの経営	53	38.4%	59	14.5%
ケージ飼育・ケージフリー飼育並行生産経営	21	15.2%	45	11.0%

資料：農水省令和6年度「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」の取組状況に係る調査、採卵鶏の結果（詳細版）（2025.6.27）なお農水省調査はケージフリーを平飼い（放牧など含む）と標記

表2 成鶏飼養羽数規模別回答数

合計	調査結果		農水省調査(2025.6)	
	137	100.0%	391	100.0%
50万羽以上	13	9.5%	38	9.7%
10～50万羽未満	33	24.1%	106	27.1%
5～10万羽未満	7	5.1%	47	12.0%
1～5万羽未満	34	24.8%	91	23.3%
5千～1万羽未満	11	8.0%	69	17.6%
1千～5千未満	20	14.6%		
1千羽未満	19	13.9%	40	10.2%

注1：羽数不明1（C経営）

注2：農水省調査はスライド4に同じ。対象経営は成鶏1,000羽未満を含む。ひな・育成のみ経営を除く。

1-3-2 2020年 農林業センサスとの比較

さらに2020年の農林業センサスと比較した。

農林業センサスは、1000羽未満もカウントされており、それは1,371経営と、全体（3,010経営体）の45.5%と半数近くを占めている。

そこで、本調査も農林業センサスも1000羽以上を100%としたときの構成比割合を比較すると、本調査の特徴は以下のようなものである。

50万羽以上の構成比は高い（センサス4.8%、本調査11.0%）

10～50万羽の構成比は高い（センサス17.8%、本調査28.0%）

5～10万羽の構成比は低い（センサス11.2%、本調査5.9%）

1～5万羽の構成比は少し低い（センサス30.3%、本調査28.8%）

5千～1万羽の構成比は少し低い（センサス12.5%、本調査9.3%）

1千～5千羽の構成比は低い（センサス23.5%、本調査16.9%）

以上より本調査結果におけるバイアスとして考慮すべき点は以下のような点である。

①CF経営の構成比が高い、②主要大手ケージ経営、大手ケージフリー経営の回答の不足、③畜産統計対象外の1,000羽未満経営がCF経営で19経営の回答がある、④5～10万羽層の回答が少ない。

以上は、今後の調査にあたり改善を行いたい。

表3 販売目的で採卵鶏を飼っている経営体数と飼養羽数（2020年センサス:全国）

販売目的の 採卵鶏飼養羽数 規模別	農業経営体		構成比		規模1000羽以上を100とした構成比	
	飼養実経営 体数	飼養羽数	飼養実経 営体数	飼養羽数	飼養実経 営体数	飼養羽数
計	経営体 3,010	100羽 1,741,645	経営体 100.0%	羽 100.0%	経営体 1,639	100羽 1,739,361
1～299羽	1,056	687	35.1%	0.0%		
300～999	315	1,599	10.5%	0.1%		
1,000～4,999	385	9,072	12.8%	0.5%	23.5%	0.5%
5,000～9,999	205	13,971	6.8%	0.8%	12.5%	0.8%
10,000～49,999	496	114,878	16.5%	6.6%	30.3%	6.6%
50,000～99,999	183	125,996	6.1%	7.2%	11.2%	7.2%
100,000～299,999	221	378,746	7.3%	21.7%	13.5%	21.8%
300,000～499,999	71	264,897	2.4%	15.2%	4.3%	15.2%
500,000羽以上	78	831,801	2.6%	47.8%	4.8%	47.8%

注：種鶏を含まない、ヒナを含む。

1-3-3 アンケート回答票の都道府県

アンケートに回答があったのは、1道2府37県、合計40道府県にのぼったが、全体のうち20票は所在地の記入がなかった。このため、全都道府県より回答があったかどうかは不明であるがほぼ全国の経営から回答をいただいたと考えられる。

表4 調査票の回答があった経営の所在地（回答数）

回答数 138		無回答 20			
北海道	7	長野県	5	鳥取県	1
青森県	4	山梨県	0	広島県	1
秋田県	3	静岡県	3	島根県	3
岩手県	0	愛知県	5	山口県	0
山形県	2	岐阜県	4	香川県	2
宮城県	2	富山県	1	徳島県	0
福島県	6	石川県	0	愛媛県	1
新潟県	2	福井県	0	高知県	1
栃木県	3	三重県	3	福岡県	3
茨城県	15	滋賀県	1	佐賀県	1
群馬県	4	奈良県	1	長崎県	1
千葉県	4	和歌山県	1	大分県	2
埼玉県	7	大阪府	1	熊本県	2
東京都	0	京都府	1	宮崎県	2
神奈川県	3	兵庫県	5	鹿児島県	3
		岡山県	1	沖縄県	1

2 飼養方法・飼育形態・鶏舎構造と羽数・経営数

2-1 飼養方法別飼養羽数

2-1-1 回収票における採卵鶏（成鶏）羽数捕捉率とケージフリー比率

成鶏捕捉率は21.8%（2024年畜産統計対比）である。2024年2月現在の成鶏めす羽数は、畜産統計では129,729千羽であり、これに対しアンケート回収経営合計羽数28,262千羽である。

また、アンケートにおけるケージフリーの羽数は896,410羽であり、合計羽数28,261,650羽にしめる比率は3.17%である。捕捉率から鑑みて、ケージフリー比率は高めに出ている可能性がある。

2-1-2 1経営当たり成鶏飼養羽数

回答経営を分類すると、ケージのみの経営（以下、ケージ経営、C経営）、ケージフリーのみの経営（ケージフリー経営、CFのみ経営、CF経営）、ケージとケージフリーを並行生産する経営（並行生産経営、並行経営）の3つに分類することができる。以下では、上記3区分での記述を基本に示していく。

1経営当たりの飼養羽数は、平均で、ケージ経営は、28.7万羽、またケージフリー経営は、0.57万羽、平行生産経営は、ケージ44.1万羽、ケージフリー2.82万羽である。

2-1-3 経営タイプ別の平均飼養羽数

ケージフリーに関していえば、並行生産におけるCF羽数が合計で多数を占め、平均も規模が大きい。

ケージフリーの合計羽数は、並行生産経営で59.4万羽（66.2%）、CF経営で30.3万羽（33.8%）、1経営平均羽数は、並行生産経営で2.82万羽、CF経営で0.57万羽である。

なお、畜産統計（2024）によれば、1戸平均成鶏飼養羽数は7.91万羽である。CF経営で採卵鶏平均羽数を上回るのは1経営のみである。並行生産経営で採卵鶏平均羽数を上回るのは10経営、かつCFだけで採卵鶏平均を上回るのは2経営である。

ケージの合計羽数は、ケージ経営で1808.7万羽（64.0%）、並行生産経営で987.2万羽（34.9%）であり、平均は、C経営で28.7万羽、並行生産経営で44.1万羽と並行生産経営の方がケージ平均羽数でも上回っている。

表5 経営タイプ別・飼養方法別成鶏羽数

	総合計	ケージ飼育経営	ケージフリー飼育経営	並行生産経営	
回答数	138	64	53	21	
採卵鶏成鶏羽数	合計	28,261,650	18,086,940	302,850	9,871,860
	平均	206,289	287,094	5,714	470,089
ケージ飼育羽数	合計	27,365,240	18,086,940		9,278,300
	平均	325,777	287,094		441,824
ケージフリー飼育羽数	合計	896,410		302,850	593,560
	平均	12,114		5,714	28,265

*ケージ飼育経営は羽数回答数63ゆえ63経営の合計・平均。

2-2 飼養形態別飼養羽数

2-2-1 ケージフリー

ケージフリーのうち、単層平飼いとは59.9%、エイビアリーとは33.2%、フリーレンジとは5.2%、オーガニックとは1.4%である。

並行生産経営は、ケージフリー全体の66.2% 単層平飼いの47.1%、エイビアリーの100.0%、フリーレンジの71.5%、オーガニックの79.2%を占める。

エイビアリーはCF経営では0.0%である。

また、エイビアリーコンビタイプは、並行生産経営でも0.0%（回答票による）

*エイビアリーコンビタイプ：状況に応じて多段式平飼いの平飼い部分に柵を立ててエンリッチドケージ様に飼養できる

表6 飼養形態別飼養羽数（ケージフリー）

		合計	単層平飼い	エイビアリー	エイビアリーコンビタイプ	フリーレンジ	オーガニック
合計	羽数	896,410	536,690	297,900	0	46,290	12,630
	構成比	100.0	59.9	33.2	0.0	5.2	1.4
CF経営	羽数	302,850	284,130	0	0	13,190	2,630
	構成比	100.0	93.8	0.0	0.0	4.4	0.9
並行生産経営	羽数	593,560	252,560	297,900	0	33,100	10,000
	構成比	100.0	42.6	50.2	0.0	5.6	1.7

2-2-2 ケージ

ケージのうち、バタリーケージは93.9%、エンリッチャブルケージは3.8%、エンリッチドケージは0.4%であり、並行生産経営は、ケージ飼育の総羽数で33.9%でありながら、エンリッチャブルケージの43.9%、エンリッチドケージの17.0%である。

またエンリッチャブルケージとエンリッチドケージを合わせて、ケージ全体の4~5%である。

*エンリッチドケージ：動物福祉に配慮した施設を含むケージシステム（EUの最低基準）

*エンリッチャブルケージ：設備を付加すればエンリッチドケージに移行できる施設

表7 飼養形態別飼養羽数（ケージ）

		合計	バタリー	エンリッチャブル	エンリッチド
合計	羽数	27,365,240	25,699,450	1,048,090	98,800
	構成比	100.0	93.9	3.8	0.4
C経営	羽数	18,086,940	16,897,950	588,090	82,000
	構成比	100.0	93.4	3.3	0.5
並行生産経営	羽数	9,278,300	8,801,500	460,000	16,800
	構成比	100.0	94.9	5.0	0.2

2-3 鶏舎構造別飼養羽数

2-3-1 ケージフリー

ケージフリーの鶏舎構造を飼養羽数で見ると以下のようなものである。ケージフリーにおいて開放鶏舎は51.6%、セミウインドレスは5.8%、ウインドレスは37.1%である。

並行生産経営は、セミウインドレスの96.0%、ウインドレスの100.0%を占めており、ウインドレスによる羽数は、エイビアイリーによる羽数を上回る。

CFのみの経営は、87.4%が開放鶏舎であり、ウインドレス鶏舎は0.0%である。

この点は論点となる。「採卵鶏の在り方（自由回答）」によれば、あるCFのみの経営（5千～1万羽）は「ケージフリーでもウインドレス鶏舎での飼育では鶏の福祉にはならないと思います」と述べているからである。

*開放鶏舎：窓があるなど自然の光や風を取り入れている

*セミウインドレス鶏舎：窓のない鶏舎だが、外から空気や日光を取り入れることができる

*ウインドレス鶏舎：窓のない閉鎖型鶏舎、換気や光量・温度を自由に調節できる

表8 鶏舎構造別飼養羽数（ケージフリー）

		合計	開放鶏舎	セミウインドレス	ウインドレス
合計	羽数	896,410	462,650	52,410	332,400
	構成比	100.0	51.6	5.8	37.1
CF経営	羽数	302,850	264,750	2,110	0
	構成比	100.0	87.4	0.7	0.0
並行生産経営	羽数	593,560	197,900	50,300	332,400
	構成比	100.0	33.3	8.5	56.0

2-3-2 ケージ

一方、ケージの鶏舎構造を飼養羽数でみる。ケージ飼育のうち、開放鶏舎は9.0%、セミウインドレスは9.8%、ウインドレスは71.3%と、圧倒的にウインドレスである。開放鶏舎とセミウインドレス鶏舎は、概ねそれぞれ約1割であり、これはケージのみの経営、並行生産経営で共通である。

*開放鶏舎：窓があるなど自然の光や風を取り入れている

*セミウインドレス鶏舎：窓のない鶏舎だが、外から空気や日光を取り入れることができる

*ウインドレス鶏舎：窓のない閉鎖型鶏舎、換気や光量・温度を自由に調節できる

表9 鶏舎構造別飼養羽数（ケージ）

		合計	開放鶏舎	セミウインドレス	ウインドレス
合計	羽数	27,365,240	2,458,600	2,673,990	19,513,950
	構成比	100.0	9.0	9.8	71.3
C経営	羽数	18,086,940	1,557,600	1,956,990	13,613,350
	構成比	100.0	8.6	10.8	75.3
並行生産経営	羽数	9,278,300	901,000	717,000	5,900,600
	構成比	100.0	9.7	7.7	63.6

2-4 飼養方法別飼養スペース

2-4-1 ケージフリー

次に飼養方法別の飼養スペースを見ていく。

2-4-1-1 ケージフリー鶏舎内

①ケージフリーのみの経営

単層平飼い 47 経営、フリーレンジは 4 経営、オーガニックは 4 経営である。

鶏舎内における 1 羽当り飼養スペースは、単層平飼い 4,066.7 cm²、フリーレンジ 3,196.3 cm²、オーガニック 3,671.7 cm²である。(面積に関しては、回答が不確かな数値が複数存在した。1 件を除き連絡先の記入があったため、主として電話で問い合わせて確認した)。

②並行生産経営

単層平飼い 16 経営、エイビアリー 3 経営、フリーレンジ 3 経営、オーガニック 1 経営である。

鶏舎内における 1 羽当り飼養スペースは、単層平飼い 2,172.4 cm²、エイビアリー 1,111.0 cm²、フリーレンジ 2,236.1 cm²、オーガニック 2,222.2 cm²である。鶏舎内スペースは、EU 基準である 1,111 cm²を大きく上回ることが示されている。

2-4-1-2 ケージフリー鶏舎外

① ケージフリーのみの経営

フリーレンジでは 8,980.0 cm²、オーガニックでは 21,766.7 cm²である。

② 並行生産経営

フリーレンジでは 2,424.1 cm²、オーガニック 2,222.2 cm²である。

鶏舎外の飼養面積に関しては、回答数が少ないことから参考である。

表 10 1 羽当り飼養スペース(ケージフリー) (cm²)

			単層平飼い	エイビア リー	フリーレ ンジ	オーガニッ ク
鶏 舎 内	ケージフリー 飼育経営	回答数 平均	40 4,066.7	0	4 3,196.3	3 3,671.7
	並行生産ケ ージフリー飼育	回答数 平均	16 2,172.4	3 1,111.0	2 2,236.1	1 2,222.2
鶏 舎 外	ケージフリー 飼育経営	回答数 平均			4 8,980.0	3 21,766.7
	並行生産ケ ージフリー飼育	回答数 平均			3 2,424.1	1 2,222.2

*エイビアリー (コンビタイプ) の回答は無し。

2-4-2 ケージ

① ケージのみの経営

バッテリーケージ55経営、エンリッチャブルケージ5経営、エンリッチドケージ2経営である。

1羽当り飼養スペースは、バッテリーケージが448.9 cm²、エンリッチャブルケージが570.4 cm²、エンリッチドケージが2,063.5 cm²である。

② 並行生産経営

バッテリーケージが20経営、エンリッチャブルケージが5経営、エンリッチドケージが1経営である。

1羽当り飼養スペースは、バッテリーケージが476.8 cm²、エンリッチャブルケージが460.0 cm²、エンリッチドケージでは回答はない。

表1-1 1羽当り飼養スペース(ケージ) (cm²)

		バッテリーケージ	エンリッチャブルケージ	エンリッチドケージ
ケージ飼育経営	回答数	43	4	2
	平均	448.9	570.4	2,063.5
並行生産ケージ飼育	回答数	18	3	0
	平均	476.8	460.0	

2-4-3 飼養方法別飼養スペース：既存調査との比較

飼養スペースは、快適性を考える上で重要な要素の一つである。

既存調査として、畜産技術協会（2015）がある。無回答を除いた構成比は表に示すように、ケージ飼育で430 cm²未満が47.6%、550 cm²以上10.2%であり、平飼い飼育では550 cm²未満が37.3%を占める。

これに対し、本調査では、ケージ飼育では430 cm²以上経営構成が61.4%と、畜技協調査の52.4%から約1割増加したとみることができる。また、ケージフリー飼育では、1000 cm²以上経営構成比100%と、畜技協調査の48.8%から2倍以上に増加している。

10年前の畜産技術協会調査との比較からは、ケージ飼育の飼養スペースは緩やかな拡大の可能性、ケージフリー飼育の飼養スペースは大幅な改善が指摘できる。

ただし、ケージの場合は、2024年に初めて日本養鶏協会がアニマルウェルフェア指針として430 cm²以上の推奨を示した。それまで国内には、畜産技術協会（2020）の飼養管理指針があったものの、飼養スペースをめぐる議論は、スペースだけがウェルフェアの保証にはならないという意見、産卵率が高ければ福祉に反しないとの議論、など、この10年間、飼養スペースに関し、必ずしも真摯な議論がなされてきたとは言いがたいことから、大きな変化は生じていないとみられる。

また、ケージフリーのスペースは、今回、いくつかの経営に飼養スペースをあらためて問い合わせたことから、アンケート調査の困難性を認識することが出来た。ケージフリーに取り組む経営は、EU基準を一つの目安に、しかも計測しやすい目安として飼養スペースを活用しているということが考えられる。政策的・学術的な規則作りが現実に追いついていない状況が見て取れる。

表12 経営ごとの飼養スペースの分布 (2025.2調査)

	ケージ		ケージフリー	
	件数	割合	件数	割合
370cm ² 未満	8	11%	0	0%
370～430cm ² 未満	19	27%	0	0%
430～490cm ² 未満	25	36%	0	0%
490～550cm ² 未満	6	9%	0	0%
550～1000cm ² 未満	10	14%	0	0%
1000cm ² 以上	2	3%	68	100%
合計	70	100%	68	100%

注：回答経営のみ

表13 日本の採卵鶏1羽当り飼養面積

	ケージ飼い		平飼い	
	件数	割合	件数	割合
370cm ² 未満	37	8.8%	8	18.6%
370～430cm ² 未満	163	38.8%	2	4.7%
430～490cm ² 未満	130	31.0%	4	9.3%
490～550cm ² 未満	47	11.2%	2	4.7%
550cm ² 以上1000cm ² 未満	43	10.2%	6	14.0%
1000cm ² 以上			21	48.8%
合計	420	100.0%	43	100.0%

資料：畜産技術協会、採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書、2015.3
 調査方法：2014.8アンケート発送、724件中398件の回答。うち平飼い実施は53件。合計は平飼い飼養形態も含む数値。平飼いの回答は43件。

3 設置施設・品種・処置・開始年・開始理由・学んだ方法

3-1 ケージ及びケージフリーの設置施設

3-1-1 鶏舎内

ケージフリーにおいて、鶏舎内に設置している設備の状況は以下のようである。

8割以上設置されている施設：巣箱、敷料、止まり木、飼料槽、給水器

6割程度設置されている施設：砂浴びエリア

1~3割程度設置されている施設：ついでみ材料、爪とぎ

砂浴びエリア、ついでみ材料に関しては、EUでは重要視されており、通常行動発現には欠かせない設備である。加えて、つつきの発現を抑制する為にはついでみ材料は不可欠と思われる。この意味では日本におけるケージフリーの欧米での実践との比較や経営・技術交流の状況などとの関連で、今後の課題として指摘することが出来る。

3-1-2 鶏舎外

鶏舎外施設について、ケージフリー経営では、日陰などを作る木26.4%、水飲み場13.2%、屋根なし飼育場15.1%、屋根付き飼育場9.4%と、少なくない経営で設置されている。そして、ケージフリー経営の中には、平飼いだけでなく、放し飼い経営も含まれることを示している。

本調査では、放し飼い経営はケージフリーの内数として集計し、鶏舎外スペースの記載があるもののみフリーレンジないしオーガニックとして区分した。次回の調査ではこの点も詳細に分析を行う。

表1-4 鶏舎内/鶏舎外で設置しているもの（全て選択）

		ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
		64	100.0%	53	100.0%	21	100.0%
鶏舎外	外敵から守るシェルター	0	0.0%	9	17.0%	1	4.8%
	日陰などを作る木など	1	1.6%	14	26.4%	1	4.8%
	水飲み場	0	0.0%	7	13.2%	1	4.8%
	屋根なし飼育場（ついでみ材料有）	0	0.0%	8	15.1%	1	4.8%
	屋根付き飼育場（敷料有）	0	0.0%	5	9.4%	2	9.5%
	屋根付き飼育場（ついでみ材料有）	0	0.0%	2	3.8%	0	0.0%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
鶏舎内	巣箱	1	1.6%	51	96.2%	21	100.0%
	敷料	0	0.0%	45	84.9%	20	95.2%
	砂浴びエリア	0	0.0%	33	62.3%	12	57.1%
	止まり木	1	1.6%	51	96.2%	20	95.2%
	ついでみの材料	0	0.0%	18	34.0%	4	19.0%
	資料槽など	3	4.7%	44	83.0%	17	81.0%
	給水器など	4	6.3%	49	92.5%	20	95.2%
	爪とぎ	0	0.0%	6	11.3%	6	28.6%

注：設問はケージフリー飼育経営へのものとしたが、エンリッチド経営は設置があるため回答のあったものを記載

3-2 採卵鶏への処置（ピークトリミング、誘導換羽）

3-2-1 換羽・ピークトリミングに関する既存調査

ケージフリー飼養技術の大きな課題として、つつきによる鶏の傷害などがある。これを防ぐためには

ピークトリミングは一手法として広く活用されている。

また鶏当たりの生産卵数を増やし、鶏舎を有効活用し、雛大費用を節約する目的で、人工的に換羽を誘導して産卵数を増やす誘導換羽（強制換羽）も広く行われている。

日本養鶏協会（2025）の生産者に対するアンケートによれば、誘導換羽を「実施（よく実施+ときどき実施）」するのは45%となっており、「よく実施する」経営と「実施しない」経営で4年間を平均すると151日の飼養期間の違いが生じている。

また、農林水産省（2025）によれば、「ピークトリミングを行っている」22.5%、「その他（ピークトリミング実施済雛導入）」52.8%。そして「換羽処理を行っている」「はい」が、54.7%である。

以上から、ピークトリミングは75%の経営が実施しており、換羽処理は、45%～55%程度の経営が実施していると推察される。

表15 誘導換羽を実施するか（構成比）

	2022.3	2023.3	2024.3	2025.3
よく実施する	59%	50%	62%	37%
時々実施する	8%	17%	12%	9%
実施しない	33%	33%	26%	55%

資料：日本養鶏協会「鶏卵生産等のアンケート調査結果について」（各年版）。調査対象は鶏卵生産者経営安定対策事業加入生産者593～697名（回収率36～48%）。

表16 誘導換羽実施の有無による成鶏飼養日数（日齢）

	2022.3	2023.3	2024.3	2025.3
よく実施する	713	710	711	696
時々実施する	648	655	665	680
実施しない	559	570	551	546

資料：日本養鶏協会「鶏卵生産等のアンケート調査結果について」（各年版）。調査対象は鶏卵生産者経営安定対策事業加入生産者593～697名（回収率36～48%）。

3-2-2 ピークトリミングの実施

ケージフリーを実施している経営（74経営）で、ピークトリミングを実施していないのは、22経営（29.7%）。一方、ピークトリミングを実施しているのは37経営（50.0%）である。

CFのみの経営は、1羽当面積は単層で4,066.7 cm²/1羽とかなり広いにもかかわらず、ピークトリミング実施率が概ね5割に上ることは、ツツキなどをめぐる鶏の傷害が大きな技術的課題であることを示している。

*この設問は、ケージフリー経営に限定した設問のため、ケージ経営の回答率は低いいためケージ経営の数値は参考値である。

表17 ビークトリミングは生後何回実施していますか

	ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
	64	100%	53	100%	21	100%
0回			17	32%	5	24%
1回	15	23%	22	42%	12	57%
2回	1	2%	2	4%	1	5%
3回						
4回						
生後150日以降のトリミングは行っていますか						
はい	1	2%	2	4%		
⑦強制換羽（誘導換羽）を行っていますか						
はい	14	0.21875	4	0.075472	2	0.095238
いいえ	6		49		19	
⑧「はい」の場合、何日齢まで飼いますか						
500日齢					1	
650日齢	2		2			
700日齢	8		0			
750日齢	3		1		1	

注：これはケージフリー経営への設問だが、ケージ経営の回答があったため記載した。

3-2-3 誘導換羽（強制換羽）の実施

また、ケージフリー実施経営（74経営）で誘導換羽を実施している経営は、8.1%あり、誘導換羽は、ケージフリーにおいては少数派である。なお本調査では、飼養日数を聞いていないため、誘導換羽がどの程度飼養日数を増加させているか不明であり、今後の調査課題である。

なお、ケージフリー経営向けの質問であったため、この問いもケージ経営の回答は参考値である。

表18 強制換羽（誘導換羽）を行っていますか

	ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
	64	100%	53	100%	21	100%
はい	14	22%	4	8%	2	10%
いいえ	6	9%	49	92%	19	90%
「はい」の場合、何日齢まで飼いますか						
500日齢					1	5%
650日齢	2	3%	2	4%		
700日齢	8	13%				
750日齢	3	5%	1	2%	1	5%

3-3 ケージフリーの品種

ケージフリーで供用している品種を聞いた。

ボリスブラウンが最も多く、次いでゴトウの品種が採用されている。

品種毎の羽数は聞いていないため、その普及度合いは不明である。

産卵率だけを見るとボリスブラウンが優位に思えるが、ゴトウの各品種の採用も多いことの理由の第一に、国産品種の重視があると思われる。

表19 ケージフリーの品種（回答経営数）

	合計	ケージフリーのみ経営	並行生産経営
	74	53	21
ボリスブラウン	50	38	12
ゴトウモミジ、さくら、ゴトウ	26	17	9
岡崎おうはん・おうはん	7	5	2
アローカナ	4	4	0
シェーバーブラウン	3	1	2
ジュリアライト	2	1	1
烏骨鶏	2	2	0
ヒベコ・ネラ	2	2	0
ハイラインソニア	1	0	1
龍神コッコ	1	1	0
名古屋コーチン	1	1	0
あずさ	1	1	0
土佐ジロー	1	1	0

注1：C経営の回答は除いた

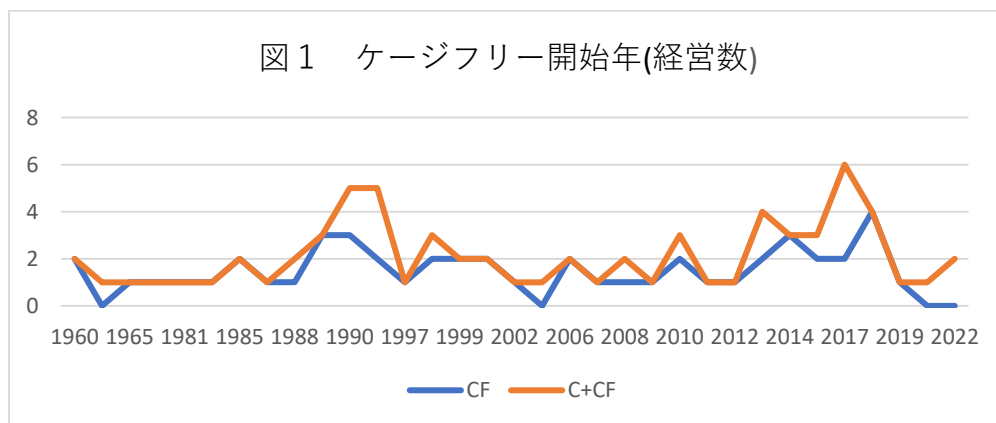
注2：無回答なし。3種と回答した経営1（CF）

注3：複数品種飼養経営も少なくない

3-4 ケージフリー飼育の開始年

ケージフリーの開始年を聞いた。グラフの青線がケージフリーのみの経営、橙線が並行生産経営である。開始年に特に特徴は見られない。またケージフリーのみと並行生産経営でも目立った特徴の違いは見られない。

ケージフリー実施経営でケージフリー1万羽以上の経営に限定してみると、1960年代：4、1980年代90年代：5、2000年代：3、2010年代：7と、2010年以降がやや多いかもしれない。



3-5 ケージフリーを始めた理由

ケージフリー飼育を始めた理由について聞いたところ、「ケージフリーのみの経営」と「ケージとケージフリーを並行生産する経営」とでは、回答に異なる特徴が見られる。

まず、ケージフリー実施経営共通で高い事項としては、

「付加価値販売のため」があげられる。

一方で、「ケージフリーのみの経営」で回答率が高いのは、

「鶏の健康増進のため」

「鶏の福祉のため」

「卵の栄養・おいしさ向上のため」
「鶏の免疫力向上のため」等があげられる。
他方、「並行生産経営」で回答率が高いのは、
「社会・取引先のニーズ」
「卵・経営のイメージアップのため」
「世界の動向を見て」等が指摘できる。

ちなみに、比較的多い羽数でケージフリーを飼養している「ケージフリー5千羽以上経営」の回答傾向を見ると、CFのみ経営で回答率が高い、「鶏の健康増進のため」「鶏の福祉のため」の回答率が高い点は、CFのみ経営の契機に近いが、他方で「社会・取引先のニーズ」の回答率が高い点は、並行生産経営の契機に近い回答項目もある。

いずれにしてもCFのみの経営と並行生産経営ではCF取組に契機・意識の違いが存在するといえる。

表20 ケージフリーを始めた理由は何ですか（4つ選んでください）

	ケージフリーのみ経営		並行生産経営		ケージフリー5千羽以上経営	
	53	100.0%	21	100.0%	31	100.0%
I：鶏の健康増進のため	32	60.4%	2	9.5%	10	32.3%
A：付加価値販売のため	31	58.5%	18	85.7%	20	64.5%
F：鶏の福祉のため	31	58.5%	5	23.8%	14	45.2%
G：卵の栄養・おいしさ向上のため	26	49.1%	4	19.0%	10	32.3%
J：鶏の免疫力向上のため	19	35.8%	2	9.5%	5	16.1%
D：社会・取引先のニーズ	14	26.4%	14	66.7%	16	51.6%
H：卵・経営のイメージアップのため	10	18.9%	13	61.9%	10	32.3%
C：労働力の有効活用のため	5	9.4%	1	4.8%	1	3.2%
E：世界の動向を見て	5	9.4%	7	33.3%	6	19.4%
B：鶏舎の有効活用のため	3	5.7%	4	19.0%	1	3.2%
K：その他（具体的に）	17	32.1%	7	33.3%	9	29.0%

3-6 ケージフリーの飼養方法を学んだ方法

ケージフリーの飼養方法を学んだ方法について聞いた。

「独学」は、CF経営で約4分の3、並行生産経営で8割と、圧倒的に多い。

また「実践している経営者への訪問やインタビュー」も共通して4割強が実施している。

やや傾向が異なるのは、CF経営に比べて、並行生産経営は、「取引業者などのアドバイス」が重要な情報源として機能していることがうかがわれる。

この点で、CF経営は、事業上の関係者から得られる情報が不足する傾向があるのかも知れず、仮にそうだとした場合、専門家からのコアな情報入手のルートを社会的に用意する事が課題として指摘できるものの、踏み込んだ問いではないため今後解明したい。

表21 ケージフリーの飼養方法はどのようにして学びましたか(上位2つ選んでください)

	ケージフリー経営	並行生産経営
	53	21
	100.0%	100.0%
独学（書籍、見学、検索など）	73.6%	81.0%
実践している経営者への訪問やインタビュー	41.5%	47.6%
かつてケージフリーをしていた方からの伝聞	17.0%	14.3%
取引業者（流通・資材等）などのアドバイス	9.4%	28.6%
その他（具体的に）	34.0%	19.0%

4 ケージフリー・採卵養鶏への考え方

ケージフリー採卵養鶏の技術的課題について、まず自由回答でお聞きした後に選択肢での回答を求めた。質問は重複するものの、選択肢よりも現実的に感じている課題について、直接言葉で表現していただくことで、的確に課題を把握したいと考えたからである。

この点は、経営的課題、採卵養鶏のあり方の問いに関しても同様である。

自由回答の項目は、選択肢に書かれていない内容を軸に整理した。また全ての回答を経営タイプ別規模別に示してある。

4-1 ケージフリーの技術的課題（自由回答、選択肢）

4-1-1 ケージフリーの技術的課題：自由回答の特徴

この設問は、ケージフリー実施経営を対象に行った。課題としては、社会的基盤整備、ケージフリー固有の技術課題、養鶏業一般の技術課題、ケージフリーと日本の生食文化の相性をめぐる課題、の4の指摘が重要と思われる。

1 社会的基盤整備

- ① 生産技術に関しては、平飼い飼育に関する技術的蓄積不足を指摘する意見がある。これは「高度な技術を必要とするためマニュアルが作成しにくい」といった意見や、「鶏に関する知識不足」の指摘、「平飼い経営が少なく優良技術を学びにくい」、「従業員教育」に課題があるという意見と同様の課題と思われる。
- ② 雛の手配や廃鶏の処理施設の不足を指摘する意見がある。これは育雛業者が限定的であり、平飼い経営を進めていく上で平飼いになれさせていない雛の導入となるとそのあとの良好な生産性が実現できないという趣旨と思われる。また、引退鶏の処理施設不足を指摘する声もある。この意味するところは、ケージフリーの親鳥は多くは換羽せずに廃鶏にするとと思われるが、その親鳥を利用した加工・販売につなげたいという主旨も含まれるだろう。実際に廃鶏の食用化（正肉、ミンチ肉、燻製、ソーセージなど）に取り組む経営は少なくないと思われ、また6次産業、経営安定に大きく寄与できる社会基盤といえる。
- ③ 消費者に伝わらない、消費者のリテラシーを課題としてあげている。消費者が、鶏のAWをはじめとするケージフリーの意義やその労力やコストを理解していないのではないかという指摘である。それはケージフリー卵の消費動向の点から感じていると思われるが、問題はその意義を感じられるようなきっかけが社会的に用意されていないことにもある。あるいは業界として取り組まれていないといった行政・業界サイドの課題として捉えることも可能と思われる。

2 ケージフリー固有の技術課題の解決

① 生産性諸指標の改善

総合的に飼養成績が悪いという指摘である。

鶏1羽当たり卵生産力の低さ：産卵率、1羽当たり産卵個数、1個あたり重量、誘導換羽しないことによる産卵期間の短縮

労働生産性の低さ：1羽当たり投下労働力の増大（掃除含む）

床面積当たり生産性の低さ：スペース増加による

資本投下金額当たり生産個数の低さ：設備投資による

飼料効率の悪さ、など（生産における季節変動の大きさ、作業環境悪化、高温多湿気候における敷料の適正な維持、緑餌の確保）

② 鶏の傷害リスク

尻つつき、生存率の低下、圧死

床面に鶏が接する事での疾病等の発生

③ 卵の安全性へのリスク増大

巢外卵の扱いのルール化

卵の安全確認方法

およそ以上のような技術課題が指摘されている。こうした技術は、ケージフリー経営による伝承だけでなく、行政機関による系統的な研究と技術普及が必要と思われる。

3 養鶏業の一般的課題の解決

これは、「ネズミ・けもの対策」「鳥インフルエンザ」「コクシジウム、マイコプラズマ、ワクモ」などが指摘されている。養鶏業一般の技術をケージフリーにどのように適用・応用できるのかという課題と思われる。

4 生食文化との相性

日本は卵の生食文化があるため、ケージフリーにはなじまないという意見もある。その主旨は、糞と卵の分離を懸命に進めてきた結果として、世界有数の衛生レベルを実現できたという現在の養鶏業があるにもかかわらず、昔に戻るように、糞と卵の分離にリスクをもたらすケージフリーは、サルモネラ汚染や巢外卵によるリスクが高くなり、火を通さない生食文化のある日本ではなじまないというものである。

理解出来る意見だが、検討すべき点もある。第1に、平飼い卵による卵かけご飯には美味しいものが多いという意見もある点である。日本卵かけご飯研究所 上野氏がおすすめる卵かけご飯向け卵には、1-2割のケージフリー卵が含まれている。糞と分離できる技術（育成段階での平飼いにならずということも含めた平飼い技術の進歩）により、この疑問を解消することが可能な日も来る可能性はあるかもしれない。第2に、巢外卵の取扱いに一定のガイドラインを示す必要もあるだろう。そうすることで、社会の安心度は高まると思われる。

およそ以上のような課題があることから、この解決に向けて何が必要かが次の調査項目となる。

4-1-2 ケージフリーの技術的課題（自由回答）

4-1-2-1 ケージフリーの技術的課題（自由回答）並行生産経営

自由回答は必ずしも階層内規模順の並びではない。

羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営で異なる。

概ね全回答を記載。

また・が1経営の回答。（以下、自由回答の記載は同様）

○CF5万羽以上

- ・労働力、清掃頻度、巢外卵の取り扱い
- ・敷料と日本の高温多湿、生食文化の相性が悪い点
- ・光線による尻つつき、鶏がシステム鶏舎用に育種改良され体重少なくなると食べる量を減らした為平飼いに向いてない
- ・生産性の低さ。労働者の作業環境の悪化

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・成績不良、巢外卵など
- ・単層平飼いでは巢外卵率の高いことが課題
- ・育雛業者が限られる、育成の良し悪しの判断材料少ない 巢外卵が多くなった場合の対応等、ノウハウが少ない
- ・巢外卵の低減、ツツキの予防
- ・巢外卵が多いので大変
- ・鶏の運動量多くなり飼料摂取量が増加し飼料効率が悪化。鶏同士の突き合いが発生しやすく生存率が低下。巣箱外への産卵した卵の管理、夏場・冬場の環境対応難しい

○CF5千羽以上～1万羽未満

- ・つつきが多い
- ・コスト(初期投資)
- ・巢外卵をいかに減少させるか
- ・巢外卵の発生、生産性がケージより3割ほど落ちる

○CF1千羽以上～5千羽未満

- ・巢外卵の多発、鶏同士のつつき、FCの悪さ、個卵重が小さい、生産コストがケージの3倍程度必要
- ・産卵率の向上、汚卵の発生増
- ・強換ができないので売り物になる卵を産める期間が短い
- ・販売と羽数調整がうまくいかない

○CF1千羽未満

- ・床面に鶏が接するリスクの回避、資料、発酵、衛生管理に気をつける。従業員の教育（鶏に対する意識の向上）
- ・手間がかかる

4-1-2-2 ケージフリーの技術的課題（自由回答）CF経営

○1万羽以上

- ・こうすれば良いというマニュアルが作成しづらいこと。手間がかかるしコストもかかるがそれでうまくいくとは限らない
- ・産卵率の維持、尻つつき対策、ネズミ・けもの対策、鳥インフルエンザ対策、緑餌の確保、自家配合飼料の材料の確保
- ・飼養環境、圧死
- ・病気：コクシジウム、マイコプラズマ、尻つつき、産卵：巢外卵対策、ワクモ。
- ・鶏の様子を日々観察する。仲良く暮らせる鶏を育てる
- ・マニュアルが存在しない

○5千羽以上～1万羽未満

- ・平成元年創業時より平飼い養鶏を実施しているので大きな課題は都度解決してきた。課題としてはワクモ（吸血害虫）、鶏インフルエンザなどケージの抱える課題と共通
- ・ネストに卵を産ませる、餌の食べムラをなくす
- ・鶏病対策、鶏の状態の把握による飼育管理
- ・集卵、産卵成績の低下、防疫対策など
- ・動物福祉やオーガニックの考え方が浸透していない為付加価値販売（ブランディング）と継続的な購入層の獲得が難しい
- ・つつきによる死亡が多い減耗率が高い。採卵に手間がかかる。
- ・巢外卵を5%未満に抑える方法、地域の環境にもよるが敷料を乾燥した状態に保つこと

○1千羽以上～5千羽未満

- ・生き物相手なので思い通りに行かない。休めない
- ・飼料設計-大手の飼料会社によらない自家配合、安全安心なおいしい卵を作る為
- ・手間がかかる
- ・鶏同士のいじめによる死亡
- ・つつきの発生
- ・巢外卵の採取、洗卵、敷料の交換（入れ替え）
- ・飼養マニュアルの不在とあったとしても使用・運用に耐えないものが多い（大学や専門学校等で養鶏を教える課程がない）
- ・ピークトリミングをせずに尻つつきを防止する
- ・夏場の暑さ対策、尻つつき
- ・環境の変化（特に夏の暑さ）に応じて鶏のストレスをいかに軽減するか。飼料代金の値上がりも含め継続のために付加価値をつける
- ・鶏舎の衛生管理
- ・尻つつき、機械化の限界があり体力負荷が大きい
- ・初生の1ヶ月目から成鶏とエサ同様にし腸の発達させ生命力と持続力を養う、丈夫な鶏から丈夫な卵。

○1千羽未満

- ・つつきによるへい死を完全には防げない、コクシジウム等、食糞による被害の助長を防ぐのは困難
- ・巢外卵、酷暑対策、尻つつきなどの悪癖、雄鶏の攻撃性

- ・冬場の床の湿気
- ・尻つきによる死鳥、癖になると止まらない。脱腸、死に至る。
- ・床の環境維持、鶏舎が谷底で湿りやすい為
- ・鶏卵の鮮度保持と産卵時間・出荷時間との関係に苦労
- ・鶏の幸せ度を見極める事
- ・機械化できると思うがやっていない。もっと効率的にできる
- ・野生動物の対策、産卵率の低下、鳥インフル対策
- ・養鶏業に特化した保険がない
- ・雪が多く増羽数をする際に強度のある鶏舎が必要。また排雪場所も考えて建物を建てる
- ・えさやりが手動で全て行う必要、また鶏舎の数が必要、ゆえに餌やりや採卵時の鶏舎間の移動が必要
- ・どの鶏が順調に産んでいてどの鶏が全く産めていないかなどわかりにくい（部屋が個々に分かれていない）
- ・グループ内ヒエラルキー最下位の鶏に対していじめが発生する
- ・敷料などの生育環境
- ・場所柄開放鶏舎にできない。対動物対策いちごっこ、鳥インフルエンザ
- ・1週間に1回、リヤカーで2km離れた全農青果センターまでおがくずを取りに行かなければならない
- ・エサの確保と配合、獣害から守る手立て

4-1-3 ケージフリーの技術的課題（選択肢）

自由回答に続き、ケージフリー実施経営にケージフリーの技術的課題を選択肢により聞いた。結果は表22の通りだが、ケージフリーのみの経営と並行生産経営とではやや違いが見られる。

まず、共通の認識は、

「つつきやいじめの発現の多さ」 「巢外卵の多さ」

「汚卵の多さ」 「敷料などの整備の大変さ」

などの糞尿処理や病気発生リスクについての課題である。

このうち並行生産経営や、CF5千羽以上経営で突出して高い回答率であったのは、「巢外卵の多さ」であり、およそ4分の3の経営が指摘している。

他方、CFのみの経営では、「つつきやいじめの発現の多さ」が5割を超えて最も高い回答率となっており、「巢外卵の多さ」は並行生産経営より3割も低い回答率である。

「巢外卵」と「ツツキ」の問題認識が経営タイプにより異なる背景は何か？ CFのみ経営では、巢外卵は少ないのか？ ツツキは並行生産経営では少ないのか？

重要な宿題として検討していきたい。

もう一つ重要なことは、「日本のケージフリー生産基準が公的に定められていないこと」への問題意識である。これは、並行生産経営で3分の1が回答し、CFのみ経営ではわずか15%の回答に留まった。基準を必要とするほどビジネスにとって困る状況にはないということなのだろうか？ むしろ並行生産経営の3分の1が基準がないことを問題にしていることにフォーカスを当てるべきだろう。

さらに、技術的課題では「死亡率の高さ」である。並行生産経営では3分の1が問題としてあげており、他方、CFのみ経営ではわずか5.7%の回答率に留まる。この理解も難しい。並行生産経営では、ケージと比較して死亡率を問題にしているのに対して、CFのみ経営では、死亡率はこういうものという認識の下で経営しているのかも知れない。ただ、死亡率は重要な技術的課題であるため、改善のための研究が求められている。

表22 ケージフリーでの生産の技術的な課題は何ですか（主な4つ）

	CFのみ経営		並行生産経営		CF5千羽以上経営	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
B：つつきやいじめの発現の多さ	27	50.9%	9	42.9%	12	38.7%
G：巢外卵の多さ	22	41.5%	16	76.2%	23	74.2%
H：汚卵の多さ	20	37.7%	10	47.6%	9	29.0%
F：敷料などの整備の大変さ	18	34.0%	7	33.3%	10	32.3%
E：糞尿処理の大変さ	14	26.4%	6	28.6%	4	12.9%
C：コクシジウムをはじめとする病気発生リスク	13	24.5%	6	28.6%	10	32.3%
H2：粉塵や鶏舎掃除の大変さ	11	20.8%	4	19.0%	5	16.1%
D：ワクモをはじめとする害虫リスク	9	17.0%	2	9.5%	4	12.9%
I：日本のケージフリー生産基準が公的に定められていないこと	8	15.1%	7	33.3%	11	35.5%
K：ケージフリー用に育雛する業者がみあたらない	4	7.5%	2	9.5%	4	12.9%
A：死亡率の高さ	3	5.7%	7	33.3%	7	22.6%
J：ケージ卵と区分して出荷までの作業をしなければならないこと	2	3.8%	2	9.5%	3	9.7%
L：その他（具体的に）	7	13.2%	4	19.0%	3	9.7%

4-2 ケージフリーの経営的課題（自由回答、選択肢）

次いで、ケージフリーの経営的課題を、ケージフリー実施経営に、技術的な大と同様、自由回答、選択肢の順で聞いた。

4-2-1 ケージフリーの経営的課題（自由回答）特徴

自由回答に関しては、選択肢にない項目を中心に整理すると、1.社会基盤の整備、2. ケージフリーの市場形成に関する課題、3. ケージフリー固有の経営課題、に分けられる。以下の説明してゆく。

1 社会基盤の整備

政策的な後押し不足が指摘されている。「エイビアリーには補助があるが単層平飼いには補助が出ない」という意見があった。畜産クラスター事業では、生産性の向上ないしはコストダウンの計画がなければ、補助金は支出されないが、農水省に確認した（2025.7.29）ところ、単層平飼いに出さないということではなく、それで生産性が向上する、ないしコストダウンが計画できるならば可能とのことである。ただこれは改修には出ないため、中小規模の経営が取り組むにはややハードルが高いと思われる。またケージフリーにすると、ウインドレスケージ鶏舎に比べて衛生リスクが高まるという暗黙の認識があるようであり、とくに開放鶏舎では審査が厳しく行われるようである。いずれにしても、大規模で新規に取り組む場合に限って補助金が出るということになるようであり、生産力主義、ウインドレス・バッテリーケージ優先とのイメージになっているのかもしれない。

そして、「消費者意識調査では事実が見えてこない」という意見がある。消費者の意識、消費者リテラシーを指摘する意見もある。確かに、研究論文では、ケージフリーなどの生産消費が広がっていない実態を背景に、現実というよりも仮定の研究が多いかもしれない。ゆえに、その仮定がどの程度確からしいかは推測が難しいケースが少なくない。こうしたアカデミズム・行政の調査に物足りなさを感じているというのが、経営現場であるということなのかも知れない。

さらに、「敷料がないことでEU等と同じ基準を求められると販路を失いかねない」という意見がある。これは、技術的課題の選択肢で、「日本でのケージフリー生産基準が公的に定められていないこと」のリスクと考えていい。すでに、外国資本のホテルを中心に、国際基準、というよりもEU基準に適合的なケージフリー卵を求める動きは顕在化しているようである。農林水産省が国際基準に合致したアニマルウェルフェアというのは、WOAHの基準を指しており、EU基準よりも緩やかな基準である。この水準で国際的資本の事業に合致する原料を提供してゆけるのかという問題意識と捉えてよく考えてみたい事柄である。

2 CF市場形成に関する課題

ケージフリーエッグ市場が適正に立ち上がるということをどのように捉えて、制度などの枠組みを考えていけばいいのか、本格的に考えなければならない時期が到来しているようである。

「ケージフリーに関心を持つ企業は増えたが、価格はバッテリーと比較され、ケージフリーが適正価格では売れない」という意見がある。ほぼ同様の意見として、「ケージフリーのコストに見合う販売価格での販売量の限定性」、そして販売先の確保の課題、市場の狭さ、販売価格の高さによる売れ行きの悪さ、など。ケージフリーがそのコストを踏まえた価格形成がなされていない、ないしコストを踏まえた価格形成の困難性が指摘されている。

その一方で、「ケージフリーがコモディティ化した」「ケージフリーが全国流通に乗るようになったことでケージフリーだけでは売れなくなっており、ブランド化が必要になっている」という意見もある。一見、ケージ

フリーが適正価格で売れないことと相反する事のように見えるが、以下のように考えたい。

公的基準のないケージフリーであるため、どの程度のケージフリーのコストが適正であるのか社会的検討が行われておらず、その為の科学的検討も不在であることから、デファクト化したケージフリーを基準に個々に判断する事となり、比較的 low コストで生産しているケージフリー経営・流通業の価格を基準に判断されるようになっている。

もしもそうであるとするならば、デファクトスタンダードのコスト構造を明確化するような社会的取り組みの下で、公的な生産流通評価基準を定めていくことが健全なケージフリー卵市場の立ち上げには求められているのかもしれない。

3 ケージフリー固有の経営課題

この部分は、ケージフリーの技術的課題と重なる。初期投資の高さ、1羽当り投資額の高さ、ランニングコストの高さ、製品化率の低さ、生産性の低さ、管理運営コストの高さなど、が指摘されている。

また労働の観点から、環境悪化、労働生産性の低さ、労働力の多さが指摘されている。

商品の安全管理のコストアップとして、サルモネラ等の危機管理をあげる経営もある。

以上のような課題を解決するには、技術交流に加えて、経営の標準数値を示してベンチマークできるような英国のフリーレンジ生産者協会（BFREPA）のような組織体でなくとも、ネットワーク型の生産者の横のつながりが必要かも知れない。

4-2-2 ケージフリーの経営的課題（自由回答）

4-2-2-1 ケージフリーの経営的課題（自由回答）並行生産

○ケージフリーだけで5万羽以上

- ・生産した卵の全量が全てCF卵として販売できるわけではない。消費者インタビュー調査ではきれいな事がはびこり事実が見えてこないこと。需要があるはずなのに実際は売れない（相場に左右される）
- ・敷料がないことでEU、米国と同等の生産基準を求められると販路を失いかねない事
- ・産卵率（死亡率の高さからも）

○ケージフリーだけで1万羽以上～5万羽未満

- ・コスト高の為どうしても高い卵になってしまう
- ・製品化率を上げる、コストに見合った販売が出来る
- ・ケージフリーに関心がある企業は増えてきたものの、価格については従来のバッテリーとの比較になるケースがほとんど。安価で取引したい気持ちはもちろん理解できるが、ケージフリーの内容よりも、「ケージフリーエッグ使用」という言葉を使用したいがための関心が多い。まだまだ“適正価格”で売れる気はしない
- ・ケージフリー平飼い卵が全国で流通するようになりケージフリーだけでは優位性がだせなくなってきた（コモディティ化）
- ・1羽当たり投資が高く生産を増やせない（システム代高い）
- ・飼養成績がケージに比べて低い。管理運営にかかるランニングコストが高い。卵の販売先は限定的（適正価格での）

○ケージフリーだけで5千羽以上～1万羽未満

- ・販売先の確保、非常にタイトな市場なので拡大等が困難
- ・全ての生産卵がケージフリーとして販売できていない

○ケージフリーだけで1千羽以上～5千羽未満

- ・生産コストの高さ＝生産性の低さ＋飼養管理の手間
- ・サルモネラ等の危機管理
- ・売り物になるような卵がとれる期間が短い
- ・販売単価

○ケージフリーだけで1千羽未満

- ・飼養管理、鶏の知識不足、販売先確保が苦勞する
- ・コスト増

4-2-2-2 ケージフリーの経営的課題（自由回答）ケージフリーのみの経営

○1万羽以上

- ・販売先の確保（コストに見合う出荷先は多いわけではない）
- ・卵の生産量を安定確保、それに対応した販路確保
- ・鶏舎が多く必要になる
- ・販売価額、販売先、経費多い
- ・集卵を含め人手がかかる
- ・鶏を見てもらい知ってもらって卵を食べてもらう
- ・販売価格が安い
- ・鶏の飼育スペースに限度がある＋従業員の数が必要な為、卵価を高く設定する必要がある

○5千羽以上～1万羽未満

- ・BtoBよりもBtoCを意識して経営しており、卸も卸担当者と直接やりとりしているので課題はないが、ここ数年で始めた場合の課題を仮定するならばブランド化と思う
- ・消費者にケージフリーなかなか伝わらない。産卵された卵の安全性の確認方法（機械に費用がかかりすぎる為、小羽数では設定しづらい）
- ・コストを価格に反映できない事
- ・消費者のリテラシーの向上
- ・ケージフリー以外にも特色があると差別化しやすい（飼料、運動場、育雛、育成など）
- ・最終顧客へ販売価格（なぜ高いのか）への理解を深めること

○1千羽以上～5千羽未満

- ・エサや資材の高騰
- ・安定的な生産と単価に見合った販路の開拓
- ・エイビアリー方式には建設補助はあるが本来の平飼い鶏舎にはない。平飼い飼育であっても消費者が飼育環境の違いを明確にわかるようにすることが必要
- ・手間がケージの何倍もかかる
- ・鶏舎内で集団で飼育している為、鶏の強弱がでてしまうことがあり、つつきやいじめが発現してしまう。鶏糞処理のコンベア等が無い為、鶏舎の大きさにもよるが廃鶏後の鶏糞処理を手作業になるので大変になる
- ・人員確保、ケージ飼いに比べ人手がかかるが販売価格に反映できるわけでもない
- ・卵価が高いため生卵の製品として販売するのが難しいため他の小売業者へ卸売りし販売する業者がほとんどいない。ネット販売で数量をコントロールして販売する必要がある。
- ・薄利多売の代名詞である鶏卵業界においてケージ飼いと差別化、ブランド構築の工夫。BtoBからBtoCへのシフト、それに関わる労力
- ・特にない
- ・野菜と同様価格転嫁がしにくい点とスーパーの値段が標準のため購入をためらう方が多い。良いとわかっているのと買えるは別
- ・季節変動による産卵数の不安定さ
- ・アニマルウェルフェア・ウオッシュ、フードファディズム
- ・営利計算を除外して鶏に合わせる、生んでくれた卵は高値で販売、恵の宝です

○1千羽未満

- ・価格の高さは、飼料効率が低く産卵率も低く規格外も多い等理由があることを消費者は理解してくれない。そもそも卵価の認識が間違っている
- ・販路（常に新規取引先を探し複数出荷する点など）、労働環境（ホコリ舞う、鶏に蹴られる、ワクモなど衛生・安全面など）
- ・ヘルパーなどに明日から旅行行くのでお願いしますと頼めない。高度な技術を要する。起業してから7年休みなし。
- ・販路の確保、餌代などの生産コストの高騰
- ・SS 級のため適当な鶏卵パックがないので他の容器で対応しなければならずコストが高くなる
- ・長期的なお客様との信頼関係をつくり続ける事
- ・野生動物、特にテン、狐等の被害対策
- ・引退鶏の処理をしてくれる施設が少ない
- ・規格外やひび割れ卵の処理
- ・平飼い養鶏をしている農家が全国的に少ないので平飼い養鶏の技術を持っている優秀な農家が少ない。また農業改良普及センターなどにもノウハウがない。初生ビナを育てるノウハウを持っている農家がとても少ない。
- ・相場を考慮した卵価の決定、労力のみでいえばもっと価格を上げたいが世の中のケージ卵を基準にした標準価格があるゆえ簡単に値上げが難しい
- ・消費者のケージフリーへの関心が薄いので「ケージフリー」という付加価値をなかなか認めてもらえない（認めてくれる人数が海外に比べてまだ少ない）ので販売力、アピール力がないと難しい。
- ・生産コストを販売単価に反映しづらい点
- ・卵のロス
- ・緑餌の確保、魚粉の値上がり
- ・スムーズな廃鶏の処理、季節により産卵率の変化が激しいので小単位での入れ替えローテーションが必要.近所へのホコリや鳴き声の心配

4-2-3 ケージフリーの経営的課題（選択肢）

ケージフリー実施経営に対し、ケージフリーの経営的課題を選択肢により問うた。ケージフリーのみの経営と並行生産経営とでは、回答傾向に違いが見られる。更に、5千羽以上ケージフリー経営としてみると、概ねケージフリーのみ経営の回答傾向に類似しており、並行生産経営の回答傾向は異なっているように読める。以下特徴を示す。

①ケージフリーのみの経営では、「販売価格」「販売先の開拓」をあげる経営が6割を超えたが、この2項目に関して、並行生産経営では、いずれも回答率が2割ほど低下する。ただし、ケージフリー5千羽以上経営でみると、CFのみの経営と同様の回答率傾向がみとれる。

ケージフリー経営に取って、少なくとも5千羽以上CFで飼育する経営では、販売価格と販売先の開拓は優先課題としてあるとされている。

②4割～5割程度の回答があった項目としては、全経営で看取できるのが「ケージフリー生産による労働時間の増加」である。労働時間の増加は、ケージフリーの共通の課題といえる。

③並行生産経営で、4割程度以上の回答率だったのは、「販売価格」「販売先の開拓」「ケージフリー生産による労働時間の増加」に加えて、「産卵率の低さ」「ケージフリー生産による1羽当りの飼料効率の低下」であり、産卵率、飼料効率の低さを課題として指摘する意見も多い。

そして同じく並行生産経営で3割程度の回答があったのは、「産卵率の低さ」「飼料効率の低下」「設備投資償却の大きさ」であり、ケージフリーの生産性、投資負担が課題として認識されている。

全体としては、販売価格、販売先の開拓、労働時間の増加、が経営の3大課題と思われる。加えて技術的課題（産卵率、飼料効率、商品化率等）が、「ケージフリーだけでは付加価値がつきにくい」や「設備投資の償却費用の大きさ」を上回る回答率であることから技術研究が急務であることを示している。

表2-3 ケージフリー生産の「経営」的な課題は何ですか（主な課題5つ）

	CFのみの経営		並行生産経営		CF 5千羽以上経営	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
B：販売価格	39	73.6%	10	47.6%	22	71.0%
A：販売先の開拓	32	60.4%	8	38.1%	19	61.3%
G：ケージフリー生産による労働時間の増加	25	47.2%	10	47.6%	15	48.4%
I：産卵率の低さ	15	28.3%	10	47.6%	10	32.3%
F：ケージフリー生産による1羽当たりの飼料効率の低下	14	26.4%	9	42.9%	9	29.0%
D：ケージフリーだけでは付加価値がつきにくいこと	12	22.6%	5	23.8%	9	29.0%
E：ケージフリーのための設備投資の償却費用の大きさ	9	17.0%	7	33.3%	9	29.0%
K：加工向け販売に際して、ケージと同価格での取引となりがち	8	15.1%	4	19.0%	7	22.6%
H：ケージフリー生産による労働環境の悪化	6	11.3%	2	9.5%	1	3.2%
L：テーブルエッグとして販売する際の卸・小売の取引条件が厳し	5	9.4%	3	14.3%	4	12.9%
C：ケージフリー卵として販売できる割合の少なさ	3	5.7%	6	28.6%	4	12.9%
J：商品化率の低さ	3	5.7%	5	23.8%	2	6.5%
M：その他	10	18.9%	3	14.3%	2	6.5%

4-3 採卵養鶏のあり方（選択肢、自由回答）

続いて、米国ではケージフリーを最低基準とする例を紹介しながら、日本での採卵湯鶏のあり方について、選択肢でお聞きした後に自由回答でお聞きした。

4-3-1 採卵養鶏のあり方（選択肢）

①飼養形態：バッテリーケージ・エンリッチドケージ・ケージフリー

「バッテリーケージ生産を基本とすべき」は、ケージ経営 66%、並行生産経営 48%、CF5 千羽以上 39%と高い一方で、ケージフリーのみの経営では 9%と極めて低い。

これに対し、「エンリッチドケージを基本とすべき」は、ケージ経営 8%、並行生産経営 0%、CF のみ経営 2%である。

さらに、「ケージフリー生産を基本とすべき」は、ケージ経営 0%、並行生産経営 0%、CF のみ経営 36%である。

以上から、ケージ経営者の 3分の2、及び並行生産経営者の半数は、「ケージを基本とすべき」と考えている。

また、ケージフリーの 5千羽以上の経営は 4割がケージを基本とすべきと考えている。

日本では、理由の如何をとわず、バッテリーケージへの支持が高い。

他方、CF のみの経営では、「ケージフリー生産を基本とすべき」34%、「ケージを基本とすべき（バッテリー+エンリッチド）」11%と、ケージフリー生産を基本とすべきという経営が最多となるため、同じ採卵養鶏業者でも、さまざまな考えで採卵養鶏を行っていることが分かる。

②鶏舎構造：ウインドレス・開放

鶏舎構造に関する選択肢として、「ウインドレス（セミウインドレス）鶏舎を基本とすべき」は、ケージ経営が 25%、並行生産経営が 19%にたいし、CF のみ経営では 2%、CF5 千羽以上経営でも 10%と、ウインドレス（セミウインドレス）を積極的に肯定する考えは多くない。

他方、「開放鶏舎を基本とすべき」は、ケージで 11%、並行生産経営で 14%、CF 経営で 34%と、CF 経営で最も支持が高く、並行生産経営、ケージ経営の順で支持する比率が低下している。2022 年シーズンの鳥インフルエンザ大流行ばかりでなく、2024 年シーズンもアンケート発送時（2025 年 1 月末）は鳥インフルエンザが流行していた時期にもかかわらず、開放鶏舎を基本とすべきの意見がウインドレスを基本とすべきと比べてとりわけ少ないわけではなく、CF のみ経営では 3分の1 以上が開放鶏舎を基本とすべきとしている。このことは、鳥インフルエンザと採卵養鶏の在り方を再検討する必要があるかもしれない。

③1 羽当り最低面積基準

なお、「1 羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋内）」は、ケージ経営 25%、ケージフリーのみ経営経営 55%、並行生産経営 52%、ケージフリー5 千羽以上経営で 45%である。

注目すべきは、①ケージフリー実施経営では過半数が最低基準を設けるべきと答え、5 千羽以上のケージフリー経営でも 5 割弱の回答率であること。②ケージ経営でも 4分の1 の経営で設けるべきと回答していること、である。

数値基準の設定は、業界や行政は意欲的とは思えないが、面積基準設定を求める率は決して低くない。この理由・背景について、よく検討する必要がある。

④コンビタイプエイビアリー

また、エイビアリーに関してやや専門的な質問も行っている。

「コンビタイプエイビアリーはケージに区分すべき」を聞いたところ、並行生産経営では33%が選択し、CF5千羽以上経営でも29%が選択している。これに対して、CFのみの経営では11%と回答率が低くなる。並行生産経営や5千羽以上経営では、エイビアリーを現実的選択肢として考えており、重要な論点であるということだろう。コンビタイプは、ケージとしての飼育もケージフリーとしての飼育も可能であるため、需要に応じたケージフリー生産を可能にするという点で生産サイドのリスクヘッジとなる反面、偽装表示の温床となるリスクもあるため、社会の信頼という視点からは危うい生産システムであることも事実だろう。なおCF経営でエイビアリーを採用している経営はなく、今後の採用も視野に入っていないと思われることが回答率の低さに繋がっていると思われる。

表24 採卵養鶏のあり方に関して、米国では州によってケージフリーを最低基準としている州がありますが、日本ではケージフリーを最低基準とすることについてどのようにお考えですか（賛成する意見にすべて○を付けてください）

回答数	ケージのみ経営	CFのみ経営	並行生産経営	CF5千羽以上経営
64	53	21	31	
バッテリーケージ生産を基本とすべき	66%	9%	48%	39%
ウインドレス（セミウインドレス）鶏舎を基本とすべき	25%	2%	19%	10%
1羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋内）	25%	55%	52%	45%
開放鶏舎を基本とすべき	11%	34%	14%	13%
エンリッチドケージを基本とすべき	8%	2%	0%	3%
1羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋外）	5%	25%	10%	13%
ケージフリーを最低基準とすべき	2%	26%	0%	13%
コンビタイプエイビアリーはケージに区分すべき	2%	11%	33%	29%
止まり木や巣箱などの付帯設備を設置することを基本とすべき	0%	36%	10%	16%
ケージフリー生産を基本とすべき	0%	34%	0%	13%
エンリッチドケージを最低基準とすべき	0%	2%	0%	0%
その他（ ）	6%	8%	19%	13%

4-3-2 採卵養鶏のあり方（自由回答）

4-3-2-1 採卵養鶏のあり方（自由回答）特徴

自由回答に関しては、飼養階層毎に回答を示すが、回答経営の特定を避ける目的で、提示順は必ずしも階層内規模順としていない事に注意が必要である。また羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営では異なっている。なお、概ね全回答を記載しており、・（ナカグロ）が1経営の回答をしめし、次の経営の回答とは改行で区切られている。

自由回答の内容を、先に見た選択肢の回答項目になかったことを中心に整理すると以下のような特徴が見られる。

①ケージは優れた飼養方法（バタリーケージが管理面・コスト面・衛生面で優れていて合理的）であるという指摘が多くみられ、ケージフリーへの強い忌避感が示されている。

これは、選択肢で「バタリーケージを基本とすべき」という回答が多いことと符合している。

②採卵鶏は人の為に存在する経済動物であり、家畜はどんな飼い方をしても良く制限の必要はない。また1羽430cm²の基準もない方が良く、として経済動物に対する扱いに制約を設けることへの疑問を呈する考えを示す経営もみられる。とても特徴的な意見であり、アニマルウェルフェアに関する啓発的活動の必要性を感じる回答である。

③科学的根拠が未提示な見解。具体的には、「日本オリジナルのアニマルウェルフェア」とか、「日本にあった独自のルール」という日本の独自性を踏まえたルール作りを主張する意見があるが、具体的には内容は示されていない。また、「ケージフリーは採卵養鶏の逆戻り」「システムを逆戻りさせるべきでない」という意見がある。ケージフリーを逆戻りとするのは、未熟な技術による平飼いのリスクや、糞と卵の分離が十分でない、という点にあると思われ、それを「逆戻り」と評価していると思われる。この点は、論点として議論すべきと思われる。

また、「生食文化ゆえCFは辞めた方が良く」という意見もある。未熟な平飼い経営のリスクを除けば、これは糞と卵の分離不十分という点に加えて、巢外卵の取扱いのルール化が出来ていないリスクと捉えられるため、巢外卵取り扱いのガイドライン議論は必要ではないか。

なお、「国土の狭い日本でケージフリー最低基準は難しい」という意見は、日本よりも人口密度の高い国でケージフリー比率を高めているEUの国もあることから、人口密度だけでなく、一人当たり鶏卵消費量都の関わりも踏まえる必要があるだろう。また耕作放棄地などの有効活用として牛の放牧を進めようという考えもあることから、単純な狭い国土という議論は検討が必要と思われる。

例えば、日本とオランダを比較すると、人口密度は、日本333.7人/km²、オランダ508.2/km²。ケージフリー（CF）比率（WEO）は、日本3.5%、オランダ88.0%。1当たり鶏卵消費量は、日本320個、オランダ198個、である。こうして人口密度と1人当たり消費量の2つの要因を合わせてみる必要があると思われるが、加えて消費方法・食べ方（殻付卵での家庭消費か加工か等）もケージフリー比率に影響を及ぼすと思われる。

「抗生物質利用はやめるべき」という意見がある。日本の採卵鶏では、採卵期間に抗生物質を使用することは禁じられているため、そのような事実が広く存在しているのかどうか？ 気になるところである。

④ケージとケージフリー共通の採卵養鶏のあり方の提起

ケージフリーを一つの判断基準としてアニマルウェルフェアを評価することへの疑問として、いくつかの意見が出されている。

ひとつは、「鶏にストレスがかかると産卵成績が下がるので産卵成績基準を設け、それをクリアすれば良い環境だと判断する」というものがある。産卵成績は、品種によっても異なるが、各種の環境要因が総合的に関わ

ってくるため、AW というよりも採卵養鶏全体の指標という意味になるのか。

もう一つは、「最低面積基準は鶏舎構造、鶏種（鶏の体重等）を基本的に設定すべき」という意見がある。これはまさに基準設定をすべきという意見と理解でき、米国では鶏種により異なる数値基準が示されている。

また「食の安全を第一に」という意見がある。まさに日本の鶏卵の安全に関して油断できないという意見である。

さらに、「CFは廃鶏後の利用率高まる」という意見もある。これは、採卵養鶏における6次産業化の方向性を考える上で重要な指摘であり、採卵養鶏の6次産業化の実態を明らかにした上で検討を加える必要性を感じる。

5 CとCFの共存の指摘（CF、並行生産）

ケージとケージフリーの共存が望ましい、という趣旨の意見が見られる。これは①規制面：米国の一部の州のように、ケージフリーを最低基準にすることへの反対。②生産者・消費者とも、ケージなのかケージフリーなのかをニーズに応じて生産する、あるいは消費する、形が望ましい、という意見と理解できる。

共存が望ましいのは執筆者も同意する。次の議論は、どのようなケージが望ましいのか、どのようなケージフリーが望ましいのか、という点になると思われる。

6 よりAWを強化した飼養法の指摘

アニマルウェルファアの視点で、行政や日本養鶏協会の提案を超えて、「1羽当たりの面積が最低550cm²が必要」（ケージ飼育の話か）、「ウインドレスではケージフリーの意味はない」、といった意見もある。こうした意見を議論する場も必要と思われる。

7 透明性のある情報発信の必要性や消費者の信頼度の低さの指摘

情報発信については、透明性のあるそれが必要という意見も指摘されている。採卵養鶏は、農産物と比較して、生産過程の可視化が極めて困難もしくは取り組みが遅れていると考えられる。その特殊性も含めて、消費者に情報発信することは、農業の他部門以上に工夫が必要と思われる。

以上が、特徴的な意見であり、個人的な感想も述べさせていただいた。次の調査に生かしたいと思う。

4-3-2-2 採卵養鶏のあり方（自由回答）並行生産経営

○ケージフリーだけで5万羽以上

- ・ バタリー、エンリッチ、エイビアリー、それぞれのルール基準は作るべき
- ・ 日本の場合には消費のそれぞれのニーズに合わせた生産方式をとるべき。生産と販売側が決めて押しつけるべきではない。

○ケージフリーだけで1万羽以上～5万羽未満

- ・ バタリーケージを反対することではない。平飼いの基準（ルール）を明確にすべきである（日本基準）
- ・ 生産者としてはケージフリーの方が良いが、実際には限られた国土で国内生産でまかなうこと、TKG やすき焼きなどの日本特有の生食文化や卵の消費量を考えるとバタリーケージを無くすことは難しい。アニマルウェルフェアの考え方も大切ですが、ケージフリーを推し進めると卵と日本の食文化がくずれてしまうとも。ケージフリーとバタリーの違いの認識がもっと広まって、一般の人がきちんとした選択ができる状態が理想です。健康的に育てた鶏が産んだ卵を望む方も、たくさん食べたいから卵は1円でも安い方が良いという方も、どちらも卵を楽しんでもらえるのは日本ならではの。
- ・ 消費者ニーズあっての生産と考えている為、ニーズに対し過度に先行してケージフリーを進めることは賛成出来ない
- ・ 地域にあった飼養管理、取引先が納得できる飼養管理

○ケージフリーだけで5千羽以上～1万羽未満

- ・ 大規模養鶏による大量生産が日本の主流でありケージフリーはハードルが高い
- ・ 日本は急な変化をよしとしないのでかなり先のゴールを定めていくのが良い
- ・ 開放式とウインドレス式やケージ飼いとケージフリーといった違いによる多様性を認め合える業界にしていくべき

○ケージフリーだけで1千羽以上～5千羽未満

- ・ 動物福祉を否定しないがサルモネラ菌などの危険を意識して現在のケージ生産は卵とフンをなるべく隔離して安全性を確保してきた。生食文化の卵かけご飯安心して食べられるのは代表的な例だと思う。
- ・ 野菜などの生産方法は自由かつ多様なのに採卵鶏はこうあるべきと言う基準を設けるのは乱暴な気がする。各生産者が備えている設備や飼育している気候、土地のサイズ、周辺住民の理解なども異なるので各生産者に在り方は委ねるべき
- ・ ケージフリーにすると日本の量が足りなくなるので一部でいいと思う

○ケージフリーだけで1千羽未満

- ・ 消費者に識別していただくマークをラベルにつけるなどの生産方法の違いを伝え生産基準を確立する等の段階的、消費者の意識を向上していくなどの取組みが必要
- ・ 鳥インフルエンザ発生において全群淘汰はやり過ぎの状況があるのにアニマルウェルフェアを論ずる事は片手落ち

4-3-2-3 採卵養鶏のあり方（自由回答）CF 経営

○1万羽以上

・ケージフリーは販売価格が高めだが世の中の傾向として物価高ニュースなどで必ず卵の話が出る。今の日本においてコスト分を支払ってまで鶏のアニマルウェルフェアに寄与しようという人は少ない。ケージフリーについても鶏が幸せかということより、生産された卵を食べたら自分にどんないいことがあるかを考えている消費者が多い

- ・鶏舎の床を土間、適度の日光浴、緑餌不可欠
- ・物価の優等生から脱却すべき。5年周期の卵価からの価額の見直し
- ・卵がどのように出来ているか知ってもらった上でどのような環境で育った鶏がいいのか？食べる一人一人が考え選んでいけばいい。
- ・ケージフリーについては社会的意義が強く消費者全員に受け入れてもらう必要はない。タンパク源として安価なラインでケージフリーは必要。
- ・開放平飼い鶏舎だが他農場の（最低基準は）意見は述べない

○5千羽以上～1万羽未満

- ・日本独自に進めてきた養鶏のスタイルを欧米が進めているからと推進していくのは違う。日本のマーケット・顧客が本当に必要としているのか、という点からスタートしても良い。
- ・販売以外を考えて鶏の状態等を中心に考え生産する事ができれば良い。現在飼料単価を中心に考えないと飼育生産ができない点が難しい。
- ・EU諸国の基準にならいケージフリーの中でも明確にランク付けして飼育環境をわかりやすくし消費者リテラシーを上げるべき
- ・ケージフリーであってもウインドレス鶏舎での飼育では鶏の福祉にはならない。ケージフリーかつ開放鶏舎での飼育が望ましい
- ・ケージ飼育について飼養方法に否定はありません。安価で経済的負担なく消費者へ届いているのも事実。ただ消費者が少しでも理解を深め選択して購入できる様にPRをしていきます

○1千羽以上～5千羽未満

- ・卵の消費量世界2位、資源のない日本にとって卵は安価なタンパク源。今の消費量を平飼いにするのは現実的に難しい。その中でも良質の卵へ元気な鶏からは元気な卵が生まれる一を作る為にも平飼い養鶏の位置づけは消費者ニーズにとっても重要
- ・日本国内では現実的にはすべてをケージフリーにすることは難しいから最低でもエンリッチドケージが望ましい
- ・ストレスなく飼育し産卵させる
- ・ケージフリーにより鶏のストレスフリーにつながり産卵後の肉にできる率が高くなる。病気が少ない。
- ・餌の1/2が卵に反映されるともいわれているなら飼育方法に加えて餌の基準を見直すべき、抗生物質（大半が使用中）投与はすぐにでもやめるべき
- ・採卵養鶏の在り方は自由でいい。国土面積の問題や新規鶏舎建築の困難性、病気に対する的確な対応などなど、どの養鶏手法も一長一短。多様性がなければ様々な問題に直面した時、不都合が大きい。
- ・日本の国土面積、人口、飼料自給率を考えるとケージとケージフリーのハイブリッドが現実的
- ・自家配合を基本としてそれを発酵させて与える
- ・鶏の食べる餌の品質が良くなること。遺伝子組み換えでない国産の物を使う
- ・産卵率の低い鶏種の作出、高産卵率を求めることを控える

- ・太陽の下でのびのび過ごすのが良い卵。健康な鶏に値する。鶏の気持ちになってみる

○1 千羽未満

- ・ケージも平飼いも養鶏産業を支える為に必要。それ以上に透明性のある情報発信が必要。
- ・消費者は台風などの停電、銅線の盗難などでケージ飼育鶏が多く死んでいる現実を知らない。自然と調和した森林放牧が鶏にとって一番最適。生産性や経済合理性を一旦度外視して鶏ファーストであるのが前提
- ・自然養鶏（動物福祉に対応した形）を基準とすべき
- ・有畜農業を基本とすべき
- ・自然の生態系の中での人間であり鶏であるので可能な限り自然に近い環境で飼育管理するのが良い
- ・鳥インフルが発生した時の対処法、全羽殺処分は反対
- ・ケージフリーを基本とすることには大反対。生産者が決めるのではなく消費者が決めるべき。ニーズがあれば続くしニーズがなければ淘汰されていく。豚も牛も様々な種類、餌、地域があっている。選択肢は必要。
- ・鶏は犬や猫と同じ心や知能を持った動物。大事に飼ってあげないとはいけません。人間は鶏に食べさせていたでいる。乱暴に扱うから鳥インフルエンザが猛威を振るう。人から人への感染症になる前に手を打たなければなりません。
- ・もっと消費者に情報開示をするべき。ただでさえ一般消費者に誤解を招く売られ方（黄身の色が濃い方がおいしそうなど）をされており、知識の共有をし、消費者自身が明確に選択できるようにありたい。そして昔のように身近にいる存在の延長線上に採卵養鶏があるようにしたい。
- ・今住んでいる地区の保健所は野外での飼育禁止といわれています。しかし他県などでは屋外でやっている養鶏農家は沢山います。うちも日光の当たる屋外で飼いたいのにと悔しい
- ・食料の安定供給が第一で鶏の福祉ができる経営体がやれば良い。なんでも外国基準にしないでいい

4-3-2-4 採卵養鶏のあり方（自由回答） ケージ経営

○50万羽以上

・バタリーケージによる値頃感のある卵の大量生産。平飼いなどの一部のアニマルウェルフェアの要望に合わせた卵。上記ニーズに合わせ共存が望ましい。

○10万羽以上～50万羽未満

- ・現状維持
- ・それぞれメリットデメリットがあると思うので農家で違って良い
- ・鶏にストレスがかかると産卵成績が下がるので産卵成績の基準を設けてそれをクリアしていれば良い環境だと判断すれば良い。バタリーケージが管理面でもコスト面でも衛生面でも優れていて合理的である。ここまで先人が磨き上げてくれたシステムを逆戻りするべきではない。採卵鶏は人の為に存在する経済動物である。
- ・そもそも家畜のためどんな飼いをしても良い
- ・1羽当たりの面積が最低 550 cm²が必要
- ・鶏舎更新に国がお金を出してくれると良い
- ・飼養面積の面で国土の狭い日本ではケージフリーを最低基準にすることは難しい
- ・飼養方法は生産者が決めるべき
- ・もし国がケージフリーを求めるのであればケージ更新の為に必要な莫大な設備費用の融通をすべき。それらを生産者に押しつけるのであれば廃業せざるを得ない
- ・制限の必要なし
- ・最低面積基準は鶏舎構造、鶏種（鶏の体重等）を基本的に設定すべき

○1万羽以上～10万羽未満

- ・1羽当たり 430 cm²の基準もない方がよい
- ・アニマルウェルフェアケージは生産効率が悪くなっている、死亡率が高かったり事故が多い
- ・アニマルウェルフェアは理解できるがケージフリーもリスクはある。ケージでも愛情を持ってストレスなく育てている
- ・卵価
- ・日本は生食が多く食品衛生上問題になる
- ・他国の意見を参考にしつつ日本にあった独自ルールを作る
- ・様々なやり方があっても良いが食の安全とビジネスとしての継続が成り立つ形でないとならない
- ・ケージフリーにして鶏は死亡リスクが上がり人は手間／コストが上がる。誰が幸せになるのか。ケージフリー＝アニマルウェルフェアは疑問。

○1万羽未満

- ・日本は生食文化があるので欧米の基準に合わせるのではなく衛生面で高いクオリティを保っているところをアピールすべき
- ・現状のまま単価が2倍以上になることを消費者が理解するか
- ・アニマルウェルフェアの考えが偏っている。声の大きな人間の立場からの話し。ペットを家畜と分けて考えるべきで家禽は食の安全性を第一に考えるべき。

4-4 卵殻印字への意見（選択肢、自由回答）

次に、卵殻印字の義務化に関してきいた。

卵殻印字はEUでは飼養方法、農場コード、賞味期限、の卵殻印字が義務化されている。飼養方法としては、オーガニック：0、フリーレンジ：1、バーン（平飼い）：2、ケージ（エンリッチド）：3、として数字で示される。類似のシステムは、韓国では全鶏卵で義務化されており、台湾でも洗卵済み鶏卵から印字が義務化されている。卵殻印字のメリットは、印字により、飼養方法等の証明が鶏卵1つずつで実現することで、消費者の購入する鶏卵の飼育方法が直ちに認識でき、AWへの認知が進む効果があることである。「欧州委員会はラベル表示を消費者に高品質な情報提供の中心的手段として位置付けている。義務付けられたラベル表示は、すべての製品がラベル表示されることを保証し、動物福祉で良好な成績を上げた製品のみがラベル表示されるといふ自主的ラベルの重要な欠点を補う。義務付けられた表示は政府による規制を伴い、消費者は民間認証機関よりも信頼できると認識する」（Eurogroup for animals, A2020）と指摘されている。

4-4-1 卵殻印字の義務化への意見（選択肢）

選択肢による回答では、「特に意見はない」が、ケージ経営で36%、CFのみの経営で49%、並行生産経営で43%、といずれも最多回答選択肢となっている。

ただし、「卵殻印字の義務化に否定的意見（義務化しない方がよい+義務化すべきではない）」は、ケージ経営で45%、CFのみの経営で34%、並行生産経営で48%であり、「卵殻印字の義務化に肯定的な意見（義務化すべきだと思う+義務化してもよい）」は、ケージ経営で11%、CFのみの経営で17%、並行生産経営で10%と、卵殻印字の義務化には反対の意見が最も多いことが見て取れる。

このことは、日本の採卵鶏の表示は、現状では、飼養方法も含めて、卵殻印字による規制は必要な状況になり、ということなのだろう。

表25 飼養方法（数字でケージフリー・ケージ等）を卵殻に印字する方法は、ヨーロッパや韓国・台湾で法的に導入され、消費者のケージフリー認知を高める効果が高いという意見があります。あなたの意見に○をつけて下さい。

	Cのみ経営	CFのみ経営	並行生産経営	CF5千羽以上経営
回答数	64	53	21	31
卵殻印字を義務化すべきだと思う	0%	4%	0%	3%
卵殻印字を義務化しても良い	11%	13%	10%	16%
特に意見はない	36%	49%	43%	42%
卵殻印字を義務化しない方が良い	20%	15%	24%	19%
卵殻印字を義務化すべきでない	25%	19%	24%	23%

4-4-2 卵殻印字への意見（自由回答）

自由回答で、卵殻印字義務化を聞いた。

4-4-2-1 卵殻印字への意見（自由回答） 特徴

多い意見としては「コストアップ」(C,CF)の指摘がある。

また、偽装を防ぐことが目的だが、印字でも「偽装が簡単にできる」(並行)という意見もある。

日本で必要としている状況にないことは、「何のための印字かよくわからない」(CF 経営)という意見に示されている。

また、「生で食べるものにインク表示はしたくない」(並行)という生食文化ゆえの意見もある。

さらに、印字の必要性がないという意見には、「直接販売のため不要」(CF)、「英国でもオープンマーケットでは印字なしがある」(並行)というように、不特定多数への販売でなければ印字は不要だろうという例外措置を指摘する意見もある。

ただ、現状のケージフリーには様々なものがあるので、その点を課題に感じる意見もある。「ケージと同じような密度での平飼も存在するのでケージフリーという言葉での訴求は一概に良いとはいえない」(CF)。

また、印字の目的として、「鶏卵の品質に飼育方法は基本的に関係ないため印字は必要ない」(C)として、あくまでも卵品質を消費者に示すのみでよいという意見や、「消費者が決めれば良い」(C)という意見も見られる。

自由回答からは、卵殻印字の義務化は、提案されているわけではないため、深く検討できていないという印象が拭えない。

4-4-2-2 卵殻印字への意見（自由回答）並行生産経営

○ケージフリーだけで5万羽以上

- ・卵を洗う日本では印字はGPでの作業となります、偽装が簡単にできてしまう、印字は農場でしなければ意味がない
- ・生で食べるものにインク表示はしたくない、食品用インクや印字機は高くAW力の高い農家は対応できない。うちは対応できるが義務化には反対
- ・設備投資を養鶏場が負担することにより参入が難しくなる

○ケージフリーだけで1万羽以上～5万羽未満

- ・卵殻印字にこだわるのは不安、卵の飼育方法による違いは卵殻以外にも卵表示可能
- ・生産管理のコストが発生することで少し高くならざるを得ないと思うと、全てではなく、ケージフリーのみ印字とかのほうの方が消費者の分かりやすさがある
- ・印字の為の設備投資に小規模生産者が対応できるかという問題はあるが、消費者が購入する上での情報が増えることは賛成

○ケージフリーだけで5千羽以上～1万羽未満

- ・バック表示でも認知は進むのではないか
- ・印字を義務化すると小規模な生産者が対応できなくなる。弊社は卵殻印字を行っているが機械やインクは高額

○ケージフリーだけで1千羽以上～5千羽未満

- ・2013年頃イギリスに住んでいたがオープンマーケットのケージフリーの卵に印字はされていなかった。印字を義務化したとき専門の機械を導入すると、労働力の確保や機械の購入費などの負担が多くなる、500-1000羽などの超小規模養鶏農家など対応できない
- ・コストが高くなりすぎる

○ケージフリーだけで1千羽未満

- ・ケージフリーを始める生産者は新規/小規模事業者かもしれないが、卵殻印字の義務化は初めて聞いたがコストが大きく感じ、施行の移行期間を長期に設ける対策が必要
- ・コスト増

4-4-2-3 卵殻印字への意見（自由回答）CF 経営

○1万羽以上

なし

○5千羽以上～1万羽未満

- ・何のための印字かわからない、手段と目的を見失っている
- ・コストがかかりすぎる
- ・コストがかかりすぎる
- ・費用負担が生じる
- ・印字があったにしても消費者が本当に理解しているか疑問

○1千羽以上～5千羽

- ・印字するコストと手間がかかり必要ない。印字しなくても POP や卵の内外のラベルで明記するので必要ない
 - ・平飼い飼育をしている経営体は家族経営、小規模経営が大半だと考えられますので設備投資が大変ですのでパックなどの別の方法であれば
 - ・印字は差別化に必要だが機械を導入するのにかかるコストが気になる
 - ・いたずらに生産者へ設備投資を求めないで欲しい。日付を変えるのはいくらでも可能だし、そもそも飼育方法や設備によって賞味期限はバラバラであることはどの業界でも認められている。その基準があるのは最も効率がいいが、現状のように数日遅い卵が買い控えるような風潮を助長するようなもの。
 - ・生産者の負担が増えないのであれば導入しても良いかと思う
 - ・卵殻印字自体が大量生産を前提にしているように思える、故に反対。
- 付加価値に値するストーリーがあれば高く売れるし必要性が生まれる

○1千羽未満

- ・印字マシンの規格以外の商品（通常パック以外の包装）もあるので義務化は反対。印字自体は反対しない
- ・ケージと同じような密度での平飼いも存在するので「ケージフリー」という言葉での訴求は一概に良いとはいえない
- ・ばら売りだったらエシカルだし良い。元々プラパックは使ってなくてモールドパック（再生紙）そのパッケージデザインで認知できれば
- ・平飼い養鶏をしている小規模農家には負担が大きい
- ・消費者への直接販売をしている為全く必要は無い
- ・卵は呼吸しているので殻に付着するものはつけない方が良い
- ・卵殻印字にとっても労働時間がかかるようなら自分の農場ではできるかどうか考える必要がある
- ・義務化しても構わないが機械導入費は個人農家には厳しい
- ・卵の殻に印字されるのは料理に使う側としては少し気持ち悪いのでパック標記でよい。
- ・必要性を感じない
- ・コストの問題
- ・卵ケースに飼養方法が明記できるのでそれで良い

4-4-2-4 卵殻印字への意見（自由回答）C 経営

○50万羽以上

- ・日本にはない印字のやり方なのでその分のコスト増加を吸収できればいい

○10万羽以上～50万羽未満

- ・自由主義経済の下経営にメリットがあると判断した人だけが実施すれば良い。そもそもケージフリー認知を法律で後押しすること自体が疑問。日本は社会主義国ではない。
- ・パック等の賞味期限表示で充分
- ・飼養方法は好みや効率でしかない、大事なのは食品としての安全
- ・ケージフリー卵が全ての面で優れているとの誤解に繋がる
- ・印字しても良いがその為のコストは消費者持ってくれますか
- ・差別化で印字するのは自由
- ・多分日本では理解があまりされない。それより今まで通りの品質なら値段が強い。ケージフリーと印字されている2倍以上の卵と普通の値段の卵なら90%位の人が安い普通の卵を買う
- ・鶏卵の品質等について飼育方式は基本的に関係ないため卵殻印字は必要ないし無駄なコスト。パッケージへの表示で十分。

○1万羽以上～10万羽未満

- ・設備等の問題、経費が増える
- ・印字のマシンも高額なので義務化は絶対に良くない
- ・消費者が決めること
- ・卵殻印字コストの問題
- ・システム導入など全て強制すべきでない
- ・生食をしない地域で始まった考え方ですからなくてもよい
- ・印字する設備の導入に費用がかかる為、各自の判断で良い
- ・ケージフリー＝善ということではない。このようなことを義務化して何がしたいのか。それよりも動物愛護と動物福祉が別物であることを一般消費者に説明し浸透させてほしい。消費者に認知させてケージフリーのデメリット、ケージのメリットデメリットも示して選ばせるべき

○1万羽未満

- ・機械導入が必要になる
- ・ケージフリーだから「何？」消費者に安全性を訴えるものではない。生産者は全てが残酷でない。むしろ愛を持っている。

4-5 今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（選択肢・自由回答）

今後ケージフリーを増やしたいかを選択肢と自由回答で聞いた。

4-5-1 今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（選択肢）

ケージフリーを拡大したいかの問いに、「前向きな回答（そう思う+少しそう思う）」は、CFのみ経営と並行生産経営で併せて56経営、76%に上る。ここからケージフリーの生産拡大意欲は強いと思われる。他方、ケージ経営で前向きな回答は17%に留まる。

問いは異なるか、日本養鶏協会が行った「飼養羽数の増減予定」アンケート（「鶏卵生産等のアンケート調査結果について」2025.3、6 全体の飼養羽数の増減予定）によれば、2025年に増羽を予定しているのは、飼養羽数階層別の違いはあるものの8%~13%である。

以上から、採卵鶏全体の羽数拡大意欲（養鶏協会調査）に比較して、ケージフリーの拡大意欲（本調査）は旺盛であると推察される。

表26 今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（1つだけ回答ください）

	ケージ経営		CFのみの経営		並行生産経営		CF実施経営		CF5千羽以上経営		CF1万羽以上経営	
	64	100%	53	100%	21	100%	74	100%	31	100%	19	100%
A：そう思う	4	6%	32	60%	7	33%	39	53%	15	48%	12	63%
B：少しそう思う	7	11%	10	19%	6	29%	16	22%	7	23%	4	21%
C：あまりそう思わない	23	36%	3	6%	4	19%	7	9%	5	16%	2	11%
D：そう思わない	28	44%	7	13%	3	14%	10	14%	3	10%	1	5%

表27 全体の飼養羽数の増減予定（2025.3養鶏協会調査、R7年分の予定）

経営階層別	全体	5万羽未満	5-10万羽	10-50万羽	50万羽以上
増やす	8%	8%	8%	8%	13%
現状維持	83%	75%	84%	89%	83%
減らす	9%	17%	8%	3%	3%

注：飼養方法は問うていない

4-5-2 今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（自由回答）

以下では、ケージフリーを増やしたいと思うか、という問いへの回答を飼養方法別に掲載している。拡大への前向きな回答には、黄色でハイライトしてある。

特徴的な意見を紹介すると以下のようである。

4-5-2-1 今後ケージフリーを増やしたいと思いますか：自由回答の特徴

CFのみの経営では、前向きな理由としては「ケージフリー卵が足りていない」という社会のニーズを背景にしているもののほか、「安価な鶏卵（ケージ？）生産が主力ではよくない」や「ケージは論外、家畜でも虐待は許されない、狭いところに押し込むのはおかしい」や、「人にも鶏にも農業にも環境にも優しい養鶏をするべき」といった考え方を理由に、増やしたいという意思を示すケースが見られる。

他方、ケージ経営で前向きな回答としては、「AWの考え方が増えてきているので少しはCFを考える」という社会のニーズを背景にするものの他、「付加価値商品販売のためCFも一部取り込みたい」であるとか、「どちらの飼い方も販売先を持ち経営安定を図る」という経営戦略の一般として取り組む医師を示している意見がある。

ただし、ケージ経営では、「ケージフリーでサルモネラフリーが可能なのか」とか、「卵殻及び卵内における雑菌数が増える」といった主に衛生面での理由から否定的意見が多くみられる。

4-5-2-2 今後ケージフリーを増やしたいと意思ますか（自由回答）並行生産（背景黄色 前向き回答）

○CF5 万羽以上

- ・ユーザーからの要望が多い
- ・消費者ニーズ、販売ニーズは増えている
- ・消費者本位であるべきです

○CF1 万羽以上～5 万羽未満

- ・日本の先進性を確保する為
- ・現在、販路の拡大に伴い少しずつ拡大中である
- ・国内でケージフリーがメジャーになる感じはまだ無いとはいえ、それでも少しずつニーズは増えている実感はあるので増やしたいが、コストや育雛の問題もある
- ・販路が確保できれば増羽も検討したい
- ・ケージフリーの卵の引き合いが強い
- ・ストレス緩和になっているか疑問だ
- ・一般消費者への販売は難しい。生産コストが高い。労働力不足。鶏卵相場に左右される場合がある

○CF 5 千羽以上～1 万羽未満

- ・持続可能な経営に資する生産／販売の仕組みが完成すれば独自性を伸ばす為増やしていきたい
- ・平飼い卵として完全にさばき切れていない現状
- ・現在規模拡大を考えていない

○CF 1 千羽以上～5 千羽未満

- ・収益性を考えると増やしたいが消費者の物価高や可処分所得が少ない現状では難しいと思う
- ・いろんな人が居るので要望に応える為
- ・販売量に限界がある
- ・労力が増える、卵が汚い、イメージ先行で食の安全を考えると(生卵を食べたいなら)あまり増やしたくない

○CF1 千羽未満

- ・今年現在、平飼い鶏舎を増す、新鶏舎を建設中
- ・鶏が健康に育つ

4-5-2-3 今後ケージフリーを増やしたいと意思ですか（自由回答） CF 経営（背景黄色前向き回答）

○1万羽以上

- ・現在のところ正直足りていない状況だから
- ・人間も自然の一部、食・農産物は可能な限り自然に近い生産方法で取り組むべきだと思います
- ・安価での卵の生産が主力であるのはいかがなものかと思う
- ・経営発展の為
- ・鶏の幸せ、人の幸せを考えて
- ・日本国全体で認知させるべきだと考えます。ただ義務化する必要はない
- ・鶏が楽しそうにしている為

○5千羽以上～1万羽未満

- ・生産が需要に追いついていないため
- ・日本では場所がなく難しい
- ・平飼いとしてエイビアリーが増えても平飼い放牧とはコスト面で差が出る。消費者の理解が必要
- ・飼育羽数が多くなると内容の良い卵を生産する事が難しくなる為
- ・労働力と設備投資が必要なため

○1千羽以上～5千羽未満

- ・多くの消費者が大量生産された卵ではないものを求めている
- ・アニマルウェルフェアに配慮した飼育管理をすることでSDGsにも結びついていく
- ・鶏がかわいそう
- ・ストレスフリーになる鶏が多く広い環境で育てることができる
- ・日本の自給率向上の為
- ・後継者が見つかること、国の鳥インフルエンザ対策が「殺せ！」から、大きく舵を切ることが前提。属人化されている現状の放し飼い手法がこのままだと、後世に伝わらず消滅してしまう。YouTubeなどには、怪しく危険な放し飼い動画が多いのも、それに拍車をかけ危惧している。
- ・食の安全
- ・基本的に大規模集約化した商社養鶏は産地団地化、輸入飼料依存、鳥インフルリスクの問題を抱えると思う。小規模分散で循環型の農業と平飼い養鶏は相性が良いと考える
- ・アニマルウェルフェアの観点から
- ・養鶏を始めたときから平飼い
- ・消費者の選択を作るため（安いものと高いものどちらを選ぶか）。ケージ飼いがあから今の飼料価値が維持されている面もある
- ・土地と販売先と人材の確保次第
- ・卵は必要だが生んでくれる鶏の気持ちになること、必要とするものは鶏に聞けばいい
- ・人手が足りない、大変
- ・これ以上増やすことは不可能
- ・養鶏業自体不要。小規模または個人の庭先養鶏で良い

○1千羽未満

- ・家畜であっても虐待は許されるべきではない。日本の養鶏の実態は虐待に近いと言わざるを得ない
- ・養鶏従事者が気持ちよく働ける環境が大切と考えている
- ・世界の動きに流されました
- ・この世はありとあらゆる生き物が命のバトンを繋いで生きている。感謝していただく鶏の命を大事に、そして最大の敬意を払う。生涯を終えるその日まで生きてて良かったと思ってもらえたら本望。
- ・自然養鶏に順応した方法のため
- ・人も鶏にも農業にも環境にも優しい養鶏をするべきと考えます
- ・持続可能な技術だと思うから
- ・ケージフリーでしか養鶏はしていませんが鶏をケージに入れるのは虐待です。これ以上鳥インフルエンザウイルスの変異を加速させてはいけません
- ・鶏はもちろんだが育成する人間側や周辺住民への影響（異臭など）の改善がみられるはずだから
- ・本来ケージフリーが当たり前のやり方であってケージ飼いが異常
- ・始めからケージフリーで生産しているから
- ・需要がある
- ・狭いところに押し込むのはおかしい
- ・回答者としては現状の規模を維持したいので増やしたいとは思って居ません、業界としてはもっと増えてほしいと思います
- ・ケージで飼うことなど論外である
- ・年ですから
- ・国内全体では増えて欲しいが私自身は現状維持が精一杯

4-5-2-4 今後ケージフリーを増やしたいとしますか（自由回答） C経営（背景黄色 前向き回答）

○50万羽以上

- ・販売先から要望
- ・アニマルウェルフェアに考え方が増えてきているしその流れで少しはケージフリーを増やしていこうと考えています
- ・1羽当りの飼養面積はケージと余り変わらないため
- ・コスト高になるから
- ・ケージフリーは私の経験からすると卵殻及び卵内における雑菌数が増える
- ・ケージにし卵価が上がりすぎると鶏卵を手軽に購入してもらいにくくなる

○10万羽以上～50万羽未満

- ・鶏に対してストレスが少ないと思う
- ・農場の敷地面積が小さい為、ケージフリーにすると飼養羽数の減少になり生産量の減少
- ・今の体制で成り立っているから
- ・ケージの更新費用が大きい
- ・手間が増えるイメージがあるから
- ・ケージフリーはやりたい人だけがやれば良い
- ・ケージの更新は費用がかかる
- ・鶏に意見を聞いて下さい
- ・経費がかかるため
- ・ケージフリーでサルモネラフリーの確保が可能なのか？
- ・消費者に安価で安心である供給が基本。世界一高い生産費の日本。鶏は経済活動です。
- ・鶏舎更新の費用がかかる
- ・衛生的に維持する為の費用や労働力が足りない
- ・飼料コストが高いため日本では生産性を重視して飼養管理を勧める
- ・単位面積当たりの飼養羽数を増やしたいから(経営面から)
- ・衛生管理上良くない、労働者がケージ飼育より倍以上必要
- ・衛生管理上良くない(サルモネラ)、労働者がケージ飼育より倍以上必要
- ・ケージフリーは鶏にも人にも優しくない
- ・国が全額、設備費用を支援してくれるのであれば考えても良いが
- ・ケージフリーをするなら今の鶏舎を全部作り直さなければいけない上に羽数は3分の1以下にしないとけないし管理の手間、コストが3倍以上になると思う。AWのために飼っているわけではない、経済上効率を高める
- ・動物福祉(アニマルウェルフェア)の考え方は経済動物である事を前提に考えるべきだ

○1万羽以上～10万羽未満

- ・より付加価値商品(製品)を販売したいと考えているので平飼い(ケージフリー)も一部取り込みたいと思う
- ・生産量が減って高卵価安定するので生産しやすくなる
- ・世の中の流れ

・ケージもケージフリーもどちらも取り組むことでどちらのことについても実践に基づく知見を持つ。どちらの飼い方でも販売先を持つことで経営の安定を図る

- ・土地、外的要因等、鶏病
- ・投資コストが高いため、消費者が選択できる環境を確保するのは良いと思います
- ・価格が上がり（現在の2倍）誰もが食べれなくなる。価格の安い鶏卵が外国から入ってくる。
- ・鶏は経済動物で狭い日本ではケージフリーは無理です。コストが高くなる。コクシジウムの病気問題等のため。
- ・生産効率が悪く、本来の目的である動物愛護ではなくなっている
- ・インフルエンザ対策が問題
- ・ケージであるから卵／鶏が清く保てる
- ・敷地面積の問題で対応が難しい
- ・鶏の健康・環境のため
- ・個別管理が難しくなる
- ・リスクは増える。売価に反映できるか、おそらく出来ないため。

○1万羽未満

- ・大規模畑作も行いながらの家族経営の為、労働力確保が課題
- ・土地がない。生食文化。設備投資額が大きく次世代に継がせられるか悩む。
- ・設備更新がままならないほど一次産業の経営は大変なのに源資を用意できない

4-6 ケージフリーに取り組む条件（自由回答）

4-6-1 ケージフリーに取り組む条件(自由回答) 特徴

CFのみ経営、並行生産経営にも聞いている。これらの回答は、ケージフリーをより増やす際の条件という意味にも読める。

ケージ経営では現在取り組んでいないため、まず、①経営としての成立が見込めるならという趣旨の回答が目立つ。「利益の出る仕組みができれば」「高付加価値展開を経営として決めれば」「一定の販売量が見込まれれば」という意見である。そして、②衛生問題への懸念のクリアを条件にする意見もある。「糞と鶏を分離できれば」などである。更に、③AWへの認識の進化・変化、消費者意識の変化、規制の変化があれば、という意見もある。「鶏にとって本当に必要だと理解できれば」「ケージが禁止になれば」「消費者の理解」などがそれに該当する。

これに対し、並行生産経営では、①政策（補助金）、②ニーズの高まり（消費者意識）、③販路の確保、④洗卵の表示、という意見がある。洗卵というのは、一般的に衛生管理上の理由から、ケージ卵では洗卵・コールドチェーン流通が一般的である為、ケージフリー卵をスーパーマーケット等で扱ってもらうためには洗卵が必要であるという趣旨と考えられる。

ケージフリーのみの経営では、「表現方法の一定化」「国民の意識の変化」などを求めている意見が特徴的である。

消費者の意識によって社会的な需要のボリュームも決まってくるため、消費者にケージフリーを志向してもらうための方策の検討が必要である。

4-6-2 ケージフリーに取り組む条件(自由回答) 並行生産

○CF5 万羽以上

- ・難しい問題

○CF1 万羽以上～5 万羽未満

- ・補助金などあれば
- ・すでに取り組んでいる
- ・“平飼い、放し飼い、ケージフリー、フリーレンジといった言葉を生産者以外で説明できる方はいないのは仕方ないが、違いを認識する必要が無いと思っている方も多い。餌に何を使っているのか? 黄身の色はどのくらい濃いのか?というバタリー故の判断材料を求めてくる方が多いので、コストよりも世間の認知が上がれば、と思っている。弊社はウィンドレス鶏舎とエイビアリー+ウィンター・ガーデンの鶏舎がある。同じ鶏でもどちらの鶏舎で育てるかによって、成長度合いは大きく異なる。決してバタリーを否定する立場ではないが、数年前から安さではなく美味しさで喜んでもらえるタマゴ作りをしたいという思いからエイビアリーに辿り着いた。自分自身は動物福祉の意識が特別高いわけでもないが、国内の様々な養鶏場を見てきた立場で、色んな意味でなんとなく後ろめたい気持ちが拭えなかったため、せめて自社の養鶏場は 生産現場から流通まで堂々と胸を張って全てを紹介できるものにしたいと思っていました。
- ・償却費が回収可能な契約での生産
- ・取引先やお客様等のニーズが高まれば
- ・販売先が確保され適正な価格で販売できる。労働力不足の解消、労働環境の改善、商品化率が向上。

○CF 5 千羽以上～1 万羽未満

- ・価格を受け入れていただける環境づくり
- ・生産環境の良さと販路の確保
- ・全量ケージ飼いの倍以上の値段で買い上げてもらえれば

○CF 1 千羽以上～5 千羽未満

- ・洗卵、無洗卵をきちんと表示すること
- ・ケージよりも収益性が良く(単位単価が高いというのではなく)、事業の継続に寄与するのであれば

○CF1 千羽未満

- ・販売先を確保し長期短期の今後の国の長期的な政策と地域行政の支援などが必要
- ・消費者の意識が変わりきちんとした価値で買ってもらえれば

4-6-3 ケージフリーに取り組む条件(自由回答) CF 経営

○1万羽以上

- ・フリー卵の価値が消費者に理解できればと思う。

○5千羽以上～1万羽未満

- ・表現方法の一定化が特定されれば良くなると思います。鶏舎外飼育もケージフリー鶏舎内飼育も分けられていないので問題があると思います
- ・敷地の確保

○1千羽以上～5千羽未満

- ・既に取り組んでいる
- ・鶏舎費用と人材確保
- ・国民全体の卵価に対する意識の変化(生産者だけが全てにおいて泣き寝入りする現状が続けば、最後にはそれ相応の因果報酬が消費者の身に降りかかる)・卵は鶏という生き物が産んでいるからこそ人間が食することができるという意識の変化 ・そこから来る後継者の確保。まだまだ日本人は自分の食べているものがどこから来て、どうやって作られているのかをほとんど知りませんし、知ろうとする人も非常に少ない。良い食べ物は、良い材料からしか作り出せない。適正な価格には、環境保全のコストや生産に従事する全ての人達への公平な対価が含まれていなければならない。そのことを意識せず食べ物が当たり前にあると思いつついることに早く気付く必要がある。
- ・広い土地

○1千羽未満

- ・適正な価格で卵が認識されること、持続可能な生産が出来ること
- ・国や家畜保健所が定める飼養衛生管理が存在しないのであれば鶏の起源は原生林といわれているので生物多様性の環境で飼育してあげたい
- ・労働に見合う収入が見合えばよい
- ・土の上で飼える土地と3.3㎡あたり7羽ほどの広さが鶏舎に求められること
- ・コストがペイできること

4-6-4 ケージフリーに取り組む条件(自由回答) C 経営

○50万羽以上

- ・生産コストの増加を補ってあまりある利益。敷料と糞を分離してサルモネラ・疾病リスク低減
- ・資材単価がケージの単価とあまり変わらず販売単価も生産者が納得できる単価で販売できること
- ・ケージフリーでもフンが鶏と分離できれば良い。排泄されたフンが短時間で分離されなければならない
- ・見合った金額で売れるのであれば

○10万羽以上～50万羽未満

- ・卵価が相場の2倍以上となること
- ・多額の援助、人員の確保
- ・利益が出る仕組みができれば。
- ・国がお金を出せば
- ・今の卵価と別にケージフリーに卵価ができること
- ・鶏にとって本当に必要な問題だと言うことが理解できれば
- ・国からの助成と経営安定の対策があれば良い
- ・顧客が高い卵を文句なく買ってくれたら
- ・生産量が増やせない点をクリアできれば取り組んでも良い
- ・人材を確保できれば。
- ・法的規制と国による設備更新の補助金のセット
- ・人材を確保できれば。
- ・卵が10倍の値段で売れるようならとり組んでもいいかもしれないが
- ・設備の更新にかかる莫大な費用を手厚く補助してくれたら
- ・買取値5倍以上、売りだと1000円くらい(10個)、もっと安く売っているところもあると思うが本当なら最低そのくらい

○1万羽以上～10万羽未満

- ・直売する商品(高付加価値商品)へのラインナップを決断した時(実際にお客様からの要望が多い)
- ・国県市が生産者に対して半額補助、消費者取引先が生産コストに見合った販売単価での購入があれば取り組んでも良い
- ・消費者が決めることだと思います
- ・現状では無理(人員、資金)
- ・ケージ飼育禁止になれば取り組みます
- ・一定量の販売が見込まれるとき
- ・国の経済的支援
- ・合う価格での販売の契約がある場合
- ・卵の価格
- ・卵1個200円を買ってくれる経済状況、もしくはそれを補う補助金があること。においや死鶏を気にせず働く人材の確保。ケージフリーがどれだけ大変か理解できる消費者がいること。

○1万羽未満

- ・労働力の確保、販売先確保、相応の価格設定ができること
- ・それぞれの認識、経営で考えれば良い。差別化と思えば差別化だし汚いと思えばやらない方が良い。ルール

として決める必要はないと思う。

- ・消費者の理解があれば
- ・ヨーロッパでスタートすることが多いがそれを各国が受け入れるのがとても不思議です。

5 ケージフリーのメリット・デメリット

以下では、ケージフリーのメリット・デメリットについてどのように取られているかを、「鶏にとって」と「経営・労働者にとって」を分けてそれぞれ自由回答で聞いた。それぞれ特徴を示した後に、具体的な回答を列記する。

5-1 ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット（自由回答）

5-1-1 ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット 自由回答の特徴

<メリット>

ケージ経営では、「自由な行動」「ストレス緩和」という認識が特徴的である。

ケージフリーのみの経営では、ケージ同様に「本来の行動ができる」という認識の一方で、「ケージフリーでも監禁状態に変わらない」という厳しい意見もある。

並行生産経営では、「自由に動ける」「鶏が健康になる」という肯定的な評価と共に、「正直分からない（鶏に聞かないと分からない）」という意見もある。このことは並行生産経営では、ある意味で率直であると同時に、ケージフリーを社会ニーズに沿って生産しているという動機に基づいていると思われる。

<デメリット>

ケージ経営では、「疾病リスク」をはじめ、「メリットを感じない」という意見の一方で、逆に「鶏にとってデメリットはない」という意見もある。真逆の認識があるということは興味深い。

ただし、並行生産経営では、「人間のエゴ」「メリットはない」というネガティブな意見がみられたほか、「つつきが多い」という現実的な指摘もある。

ケージフリーのみの経営では、「特になし」という意見であり、メリットは無いなどの否定的な意見は見受けられない。

以上をみると、ケージ経営と並行生産経営では鶏のメリットを確信しているわけではない、という認識の類似点を感じる。一方、ケージフリーのみの経営は鶏へのメリットを疑わない経営が多いようである。

5-1-1 鶏にとってのメリット・デメリット（自由回答） 並行生産

OCF5 万羽以上

- ・メリットはないと思います、人間のエゴだと思います。エンリッチが一番いいと思います
- ・自由に動き回って良いと思うが競争が激しいので弱い鶏は生き残れない。弱った鶏をみんなで攻撃して殺してしまう
- ・人間的発想で考えるとケージフリーがあたかも鶏にとって幸せと人は言っていますが果たして鶏がそれを臨んでいるかどうかは疑問です

OCF1 万羽以上～5 万羽未満

- ・5つの自由に関する事
- ・鶏本来の習性に適した環境が形成される一方、労働環境の悪化。卵の製品化率の問題（コスト高）がある。
- ・弊社のエイビアリーでの鶏を見る限りは、肉付きも羽艶も良くメリットしか無いように感じます。鳴き声も

優しく人間を恐れることもないです。糞尿などと接触することも無く元気に飛び回っていますが、やはり強い鶏と弱い鶏というのは出てきますので、それが鶏にとって良いのか悪いのか、それとも自然なことと捉えるのかはわかりません。

- ・鶏舎内で居場所、行動の選択の自由があることがメリットではないか、デメリットは鶏に聞かないとわかりません
- ・メリット:自由に動ける、デメリット:いじめられる鶏がいる、時々圧死する
- ・環境管理が良好な場合はストレスや苦痛が少なく行動欲求が満たされた健康的な生活が出来る。環境管理が悪化した場合はつつきが発生したり死亡率も高くなる

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・自由に動き回れる。つつきが多い(いじめ)
- ・ケージ卵より確実に美味しい卵になるので鶏に福祉にとっては良いことではないか
- ・メリットは羽ばたきや敷料での砂浴び穴掘り、止まり木での休息といった本能に基づく行動の自由.デメリットは順位制のある生き物なのでどうしてもツツキ等いじめが発生する。またそのことでエサが均等に充分食べられない鶏が発生する

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・自由に動ける分、多数が1羽をいじめる
- ・正直わからない

○CF1千羽未満

- ・メリットは鶏が健康になる、5つの自由、鶏の社会が出来伸び伸びしている。デメリットは鶏についての衛生管理が不十分だと重大な病気を誘発しかわいそう
- ・免疫力アップ、デメリットは特になし

5-1-2 ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答) CF 経営

○1万羽以上

- ・鶏の健康
- ・鶏の社会の形成(生活ができる)。鶏の縦の社会のため強い鶏、弱い鶏ができる。
- ・鶏が羽ばたいたり砂浴びしたり止まり木で休むなど本来の行動が出来る点ではメリットがあるのではないかと思う。一方、集団になるとペックオーダーなどでいじめられる鶏も少なからずおりそれも本来の行動であるが、気の毒にも見える。どっちが良いのかわからなくなる。
- ・割と自由、育ちで仲が悪いと逆効果
- ・ケージフリーと言っても監禁状態であることに変わりはない。少しでも環境を整えることで5大原則の実現に近づくと考えます
- ・メリット有り、デメリット無し

○5千羽以上～1万羽未満

- ・メリットは鶏の健康の増進、デメリットは平飼い養鶏の技術が確立されていない
- ・自由に動ける、圧死、強弱の差が発生しやすい
- ・運動量も豊富に取る事ができそれが良い卵の生産に繋がる点
- ・そもそもメリット・デメリットの話ではない
- ・鶏の習性に沿った行動が出来るため活力がある。病気に強い。順位付けなどで鶏が痛みやすい。
- ・ケージ飼いを知らないのかわかりかねます

○1千羽以上～5千羽未満

- ・自由に動き回れるから健康で質の良い卵を産む、巣箱と巣外で産む鶏に分かれる。つつきやいじめがある最も自然に近い鶏にとっての生育環境に近い
 - ・鶏たちの習性が生かされ伸び伸びとした生活環境の中で健康で薬品に頼らない飼育が可能、悪臭がなく飼育できる事がメリット、デメリットはツツキ
 - ・ストレス緩和が大。鶏同士のけんか。
 - ・ストレスフリーで広い環境で育成することができる。鶏舎の広さにより鶏糞の処理が大変、つつきやいじめが発生しやすい
 - ・良い卵とは良い鶏の卵から良い鶏とは?で始めました。食べ、運動する、日に当たるがメリット。デメリットは思いつかない。
 - ・メリット・潜在能力を呼び覚まし、人間が地球上に現れる前に培った能力の上に立った、鶏らしい暮らしができること。またその能力が引き出されること。デメリット・鶏の持つ能力によって生存率が大きく変わる・アニマルウェルフェアの各項目は生産者の考え方で効果や深さが大きく変わる。止まり木があってもそれがなぜ必要なのかを理解しようとせず、単に設置しました感を出すのはいかがか。
 - ・鶏にとっては無いと思う
 - ・よく運動することで良質な卵の生産につながる。デメリット：尻つつきが発生すると大変な数が死亡する
 - ・鶏舎の中で鶏を飼いながらたい肥を作る
 - ・集団で飼育しているのでどうしてもいじめやストレスはある。地面に接しているため病気のリスクも。
- つつきやいじめによるストレス
- ・過密に飼えばデメリットのみ
 - ・おいしい卵を産んでくれる、安心な卵を食べられる。手を加えることでなく手伝うぐらいに

○1 千羽未満

- ・ストレス軽減、免疫力強化、個体をよく観察する必要がある
- ・メリット:止まり木で寝る、砂浴びをする、つつくなど本能を発揮できる。デメリット:土中のウイルスに接触するリスクあり。
- ・自由に運動が出来てストレスがたまりにくい
- ・どこまでのケージフリーによるかですが野生動物の格好の餌食となる
- ・自由に動き回れる、鶏本来の性質に合った生活が出来る。尻つつきや喰い負けなど群れになじめない個体が排除される
- ・鶏が健康になる為良質卵が得られる。飼育に長時間かかる。
- ・幸せな一生を送る事
- ・鶏の自由を第一に考えストレスを与えないようにしなければ健康な鶏にならないし健康な卵にもならない、食べる人間も健康にならない
- ・少なくともケージ飼いよりは鶏のストレスは少ないと思う。国産飼料での飼育が可。獣害のリスクが大きい。
- ・運動できる。他の鶏とのふれあい。寒いときは日向へ、暑いときは風通しの良い日陰へ。
- ・ケージフリーの飼養技術を持っている人が少なすぎるので鶏が体調不良を起こすこと。メリットは動き回るにより動物としての最低限の自由が得られること。
- ・健康な成長が望めること。そしてその鶏が産む卵は売る際にもイメージが良い。デメリットは特になし
- ・プラス:ストレスが減る、マイナス:つつき合い? 私人間なので想像でしかないです、結局「人にとって」につながる
- ・メリットは自由に運動できることによるストレス軽減。デメリットは尻つつき等の発生
- ・鶏にとってはよりよい環境かと
- ・鶏にとっては何のメリットもない生産性だけのため、消費者も考え直すべき。
- ・精神衛生上とても良い、自由に歩ける、砂浴びできる、暑いときは木陰へ移動できる
- ・ストレス軽減、免疫向上、卵質向上など.デメリットはないのでは

5-1-3 ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答) C 経営

○50万羽以上

- ・メリットは鶏の自由な行動発現。デメリットは糞と接触し疾病やサルモネラリスク
- ・メリット:鶏にとって優しい
- ・メリットは自由に動ける、デメリットは鶏フンをついばみコクシヤクリストの原因になり易い
- ・鶏でなく人間にデメリットが増す。日本人は卵を生食する為絶体にフリーはしない方がいい。ヨーロッパ、アメリカ、中国など日本以外の国は生食をしない
- ・鶏病
- ・管理が難しくなる

○10万羽以上~50万羽未満

- ・ストレスの緩和
- ・運動不足、ストレスの緩和
- ・床面の食糞、床敷のネズミによるインフルエンザのリスクが高い
- ・動き回れるからストレスが少ない、フンの上などを歩いてしまう
- ・ケージフリーの場合、鶏は自分の居場所を自分で見つける必要がある。他の鶏含む外敵から攻撃されないか警戒するストレスはあるか。集団で同じ方向へ移動すると圧死したり怪我をする可能性。
- ・デメリットは鶏糞を食べることがある、不衛生でネズミの温床になり易い。メリットなし。
- ・ストレスフリー、デメリット生存率、巢外卵
- ・順位が優先される鶏社会の中で大群飼育のストレス負担の配慮が不明確
- ・通路の敷料を食べる為不衛生
- ・メリットは好きに動ける、デメリットは辱められやすい、糞を踏んでしまい易い
- ・メリットは鶏が自由に活動できること。デメリットはあまりないと思う。
- ・鶏本来の姿に近い、ストレスが少ない。デメリットは特にない
- ・メリットは動き回れる、デメリットは鶏病が出やすい
- ・鶏本来の姿に近い、ストレスが少ない。デメリットは特にない
- ・鶏にとってメリットは特にない。デメリットは密飼いになる、汚くなる、病気が広がりやすい、ストレスが係りそう、もともとそんな大きな群れにならないのでは
- ・メリットはストレス無く生活できる、デメリットは病気のリスクが高まる
- ・あまりない、鶏に聞いて
- ・鶏にとってのメリットは感じない。デメリットは疾病リスクが増す、群飼育による社会的ストレス。

○1万羽以上~10万羽未満

- ・メリットはより高価格帯の商品のアイコンナップ。デメリットは生産効率の低下、疾病などのリスク。
- ・鶏にとってデメリットはないと思います、病気の発生リスクは高い
- ・メリットは鶏本来の行動に少しだがなる。デメリットは病気になりやすくなる可能性が高まる
- ・メリットなし、デメリット病気。
- ・衛生と病気の問題が多く鶏にとって良いことなのか疑問である
- ・卵の不安定性、鶏の健康、餌をバラバラ食べてしまう、縄張り争いなど
- ・鶏はケージに入れて産卵するように半世紀かけて改良された動物で、就巢性等ケージ飼育に適さない形質を排除した変態生物ですがそのことをどのように考えているのでしょうか
- ・鶏は自由になる分、つつきや餌の量が増える
- ・メリットはストレス軽減、デメリットは死鶏の発見が遅れる、鶏同士のけんか

- ・メリットは自由に動ける、好きなものをより好んで食べられる。デメリット鶏の特徴として優劣をつけて弱いものへのいじめは起こる＝必ずストレスフリーではない、優劣によりエサを十分に食べられてない鶏が出たりより好みをして食べることで栄養バランスが崩れて健康への影響もある
- ・鶏の健康／環境の為
- ・ある程度自由に移動できる。つきやいじめで死ぬ確率が高くなる。フン等とちゃんと分離しないと病気のリスクは高まる。

○1万羽未満

- ・鶏がそこまで本当に求めているのかわからない。
- ・鶏は生物としてストレスが減ると思う。病気にかかったらすぐに発見できず治療が遅れパンデミックになる。

5-2 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット（自由回答）

5-2-1 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット 自由回答の特徴

<メリット>

ケージ経営では、「イメージアップ」「販売戦略立てやすい」という経営にとってのメリットを指摘する意見がある。

並行生産経営では、同様に、「イメージアップ」「多様化をアピールできる」「倫理的に誇れる」といった意見がある。いずれも社会的にみたイメージを意識している。

ケージフリーのみの経営では、社会的にみたイメージでは無く、「気持ちいい」「ストーリーができる、やりがいがある」「小規模なら農業と兼業できる」「鶏舎建設コストがシステムケージに較べかからない」「CF卵の需要がある」といった、ケージ経営、並行生産経営と異なる視点（精神的な面など）でのメリットを指摘している。

この点も、ケージ経営と並行生産経営の類似性が指摘できる。

<デメリット>

ケージ経営では、「メリット無し、デメリットしかない」という意見が代表的である。

並行生産経営では、「ヒューマン・ウェルフェアになっていない」「利益にならない」といった現実的なデメリットが指摘されている。

ケージフリーのみの経営でも、「労力、手間」へのデメリットの指摘がなされている。

デメリットの部分は、技術的経営的課題と概ね重なる指摘がなされている。

5-2-2 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答) 並行生産

OCF5 万羽以上

- ・経営的には売り先が多いのでメリットは大きいですが設備や人員に係る為支出も多い。労働者にとっては作業が大変
- ・AW 団体から会社を守る
- ・アニマルウェルフェアと言うが決して管理者のヒューマンウェルフェアにはなっていない (EU と USA も管理者はほぼ外国人労働者)

OCF1 万羽以上~5 万羽未満

- ・倫理的に誇れるようになる、後進に引き継ぎやすい
- ・経営としては取扱商品 (鶏卵) の多様化により消費者へのアピールが可能。労働者にとっては労働環境の手間・悪化がある
- ・まだまだ適切な単価で販売するには、世間の「ケージフリー」の認知度ゆえにむずかしいの です。弊社はバタリー鶏舎もありますが、ケージフリーだけだとしたら成り立つ自信はまだ ありません。労働者にとっては思いの外手間がかかることは殆ど無いので、バタリーよりも 大変ということはあまりありません。むしろ「良い卵を作りたい」という意識がみんなにう まれてきたので良かったと思っています。
- ・労働者にとってはより「生き物を飼育している」という感覚が強くなると考え、工業然としたケージ飼育よりやりがいを感じられる可と思います
- ・メリット:鶏と戯れることができる、デメリット:鶏がよってきて歩きづらい
- ・経営のイメージアップ、付加価値販売、差別化ができる。労働時間の増加 (集卵作業や敷料などの整備、掃除)

OCF 5 千羽以上~1 万羽未満

- ・鶏とのふれあい、労働効率が悪い
- ・小規模生産者にとって自立経営が出来やすいと思う
- ・メリットは生産者として技量を試すことができる、やりがいがある、お客様に認めてもらうことができる。デメリットは手間暇がケージ飼いに比べて増える

OCF 1 千羽以上~5 千羽未満

- ・アピールにはなるが利益にはならない
- ・消費者の意識も年々深まっているが市場ではやはり安価な卵が売れる。仮に 2 割のブランド卵の市場がこれからの物価上昇もあり、4-5 割になることは考えられない。ケージフリーが一般化した時にまた卵は安売り合戦になる
- ・羽数の飼育には大面積が必要である

OCF1 千羽未満

- ・メリットは養鶏農家生産者のイメージ向上、生産者としてのやりがい、地域貢献、消費者とのつながり (食意識向上) など、新たな食意識改革が生まれる。デメリットは付加価値を伝えるまでの時間がかかりまた経営として初期投資と知識向上に価格設定に左右される
- ・高価格販売、コスト増

5-2-3 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答)

CF 経営

○1万羽以上

- ・確実に付加価値はつけられるが消費者は飼育方法と共に飼料（NON-GMO やオーガニック）やワクチン不使用なども求める事が多い。その対応はコスト増につながる。
- ・わりとゆったりした心境でいられる。体は疲れる。
- ・経済的なメリットは特別なものはない。倫理観を持って仕事に取り組んでいるという自負により貢献しているという意味は芽生える
- ・いきいきとしている様子を見ていて気持ちいい

○5千羽以上～1万羽未満

- ・労力、手間がかかる
- ・メリットはケージフリーで良い卵を作れば販売先が自然と増えていく点。デメリットはなかなか消費者にケージフリーが理解されない点。
- ・卵の需要があること。鶏と飼育者との距離が近く仕事に愛着がわくこと
- ・弊社の場合は会社の歴史に沿ってストーリーが出来ること。デメリットは生産コストが高いことによる販売価格

○1千羽以上～5千羽未満

- ・鶏の様子がよくわかる、害虫、獣害の対策がいる。手間がかかる。
- ・鶏と共に生きている実感がある
- ・悪臭がなくハエの発生がないので仕事のやりがいが出る
- ・デメリット大、卵が汚れる、けんかする
- ・鶏舎建設コストがシステムケージに比べるとかからない、常に鶏舎内と巣箱内をきれいに保つ必要があり清掃等に時間がかかる
- ・メリットは差別化、デメリットは労働過多。
- ・メリット：鶏の質が変わりそれに伴って卵の質が大きく変わり差別化／商品訴求が可能になる。鶏を一つの命があるものとして向き合うようになる。デメリット：人間の都合ではなく、鶏の都合に合わせて飼育する必要がある(メリット面も)。鶏や卵のばらつきが出るのは自然のことで、それを説明し理解してもらう必要が事あるごとに発生する用地の準備、敷料の確保、鶏ふんの処理等など飼育環境を整えるための経費と労力が大きい技術が属人化してしまう過剰な動物愛護スピリッツを持つ人や家禽とペットを同等視する人などの対応に苦慮する。法律などで縛る衛生管理や飼育管理、予算の考え方は、一定規模のバタリー用であるため、そぐわないものが非常に多い。
- ・今後は国内消費のパイが少なくなる中、健康志向が高まり、ニーズは増えていく
- ・経営的には高価格で販売できる.労働者的には臭いの少なさ鶏を飼うやりがいがある
- ・労働環境の悪化
- ・小規模であれば農業生産との併業可能、機械化が難しい故に体力負荷
- ・餌やりと卵集めが手間だが苦にならない労働

○1千羽未満

- ・今の日本では利益は生み出せない、家畜も飼養者も喜びがある
- ・メリット：心地よく働く事ができる。デメリット：生産性が低い
- ・付加価値があり差別化でき高値で売れる、システムが進んでいない為工夫の余地があり面白みがある
- ・朝目が覚めて鶏が元気だと私も元気になる。精神衛生上、鶏にとっても人間にとってもメリットが大きい。
- ・商品の差別化、単位宴席当たりの飼育羽数が少ない、飼料効率が悪い

鶏の福祉に良い。労力がかかる。

- ・幸せで有意義な人生を送る事
- ・鶏を飼うことは人間の健全性を保つための行いであり様々なデメリットはできるだけなくなるように考えて取り組む。メリットは健康、お金ではない
- ・家族経営が可能
- ・単価を高く設定できる
- ・鶏卵の価格が基本的に安いのでケージ卵も含め平飼い卵は特に所得が上がらない。その割に365日の仕事でとてもストレスがある。メリットはちゃんと飼育できれば面白いように産卵率が向上する。
- ・付加価値が付けやすい、エサの材料費がかなり抑えられる。デメリットは自家労力でエサをやり採卵作業を行う必要がある。
- ・プラスは付加価値をつけて売れる、一思い浮かびません、なんだかんだ総合的に見ると+につながると思う
- ・付加価値をつけられる、野菜残渣の利用、コストが高い
- ・鶏舎の隅々までの目配り、環境整備を心がけることが大切
- ・循環型農業に組み入れた平飼い養鶏は野菜クズの処理、分の利用等で非常に良い

5-2-4 ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答) C 経営

○50万羽以上

- ・メリットはイメージアップ、デメリットは敷料からの粉塵、アンモニア増加による職場環境の悪化。
- ・生産量の低下、飼育羽数の低下
- ・労働負荷の増大
- ・メリットは販売戦略をやりやすい。デメリットは価格を上げられなければ赤字
- ・作業量が多くなる
- ・現在のケージでも人手不足なのでケージフリーは人材確保が難しい

○10万羽以上～50万羽未満

- ・従業員の増員となる
- ・人材、コストの倍増
- ・羽数減少による生産量の低下、訓練や巢外卵対応による人員確保
- ・衛生管理が届きにくい
- ・コスト以上の価格で売れるのであれば経営にとってメリット。管理の手間はバタリーと比較し増えるが労働者を増やし定時で帰れる仕組みとすればメリットもデメリットもない。
- ・現行よりも収容羽数が減る為収益性悪化。ネストへの訓練、巢外卵除去など労働性悪化
- ・ない
- ・美味しい卵ができる、デメリット作業性が悪い
- ・巢外卵の問題や衛生環境の保持等の不安要素がある
- ・巢外卵の除去、収容羽数減少によるデメリット
- ・メリットなし、コストが高い、不衛生になりやすい、様々な意味で効率が悪い
- ・自由が増える
- ・デメリットは飼養羽数がかせげず生産量が増やせない。メリットは高品質で高く売ることができる。
- ・卵の品質のクオリティが高い、ブランド化。飼育の人手がケージ飼育より倍以上必要。
- ・メリットは卵価に付加価値がつけられる。デメリットは設備の更新経費の大幅増大
- ・卵の品質やクオリティが高い、ブランド化。人手が倍以上必要
- ・メリットはない、強いていうなら他との差別化、デメリットは日々の観察が行き届かない。衛生的に良くない。価格に反映できるかどうかわからない。労働時間が長くなる。
- ・メリットは対外的に印象が良くなる、デメリットは採卵の手間が増える
- ・メリットなし、面積当たりの羽数低下、エサ効率低下、鶏糞をどうするか、最後に出すのか、おがくず等敷くのか、まぎると発酵鶏糞にはならない、死鶏を見る時、靴は鶏糞だらけ、多段のケージフリーだといろんなところが鶏糞まみれ
- ・メリットはない。管理に手間がかかり労働生産性が低くなる。単位面積当たりの生産量が減少し既存の消費量を賄うには多くの面積の開発が必要となり結果的に環境破壊につながる

○1万羽以上～10万羽未満

- ・メリットは鶏の行動性により労力は軽減すると思われる。デメリットはマニュアルの作成が難しい、予測不能の自体がある。
- ・生産性が低い、鶏舎の清掃、消毒等大変、鶏業対策

・メリットは販売方法を考えればブランド力強化につながる。デメリットはケージフリーはコストが高い、販売を間違えると失敗する

- ・経営コストアップ
- ・3 倍の面積と努力が必要
- ・生産量が減りコストが上がる、卵価もあがる
- ・価格と販売量のバランス
- ・メリットはイメージが良くなる、デメリットは鶏の管理が大変になる
- ・作業負担が少なくなる。卵の品質が安定しにくい（食べる量のコントロールができない）.産卵率はケージと比べると下がる。卵に汚れがつきやすく B 卵 C 卵となる率もアップする
- ・販売の適正価格
- ・何となく消費者のイメージは良くなる。コストがものすごく上昇する、何をするにも全てに手間がかかる。働く人の確保が難しい。

○1 万羽未満

・手間が増える。以前テレビの特集で見たがこびりついた糞を掃除するのに時間と労力がかかっており経営者の自分がやりたくない仕事を従業員にやらせられない。

作業工程が増える。設備投資が増える。⇒消却できない。鶏の体調管理が難しくなる。⇒卵や肉の衛生面が不安になる。デメリット、リスクしかない。

6 農畜産物販売金額、関連事業金額

最後に、鶏卵をはじめとする生産物の販売金額と6次産業化を意識した関連事業販売金額を聞いた。

6-1 農畜産物販売金額

2024年の畜産統計（2024年2月）で、平均成鶏飼養羽数は、7.91万羽である。2019年から2023年までの5年間平均の営農類型別経営統計における採卵鶏全国平均の1万羽当たり畜産収入は3450万円（平均8.66万羽）であるので、この畜産統計の平均的羽数（7.91万羽）に経営統計の畜産収入額（3450万円）をかけると、2億7290万円となるため、3億円を、採卵鶏の平均飼養羽数における販売金額と仮定して経営類型別の特徴をみることにする。

表では、回答のない経営もあるが分母から除いていないことに注意が必要である。

農畜産物販売金額で、3億円以上の経営は、ケージ経営で46%、並行生産経営で62%にたいし、ケージフリーのみの経営ではわずか2%となる。

経営規模は、同じくケージフリーを実施していても、ケージフリーのみの経営は販売額1億円未満が85%と圧倒的であるのに対して、並行生産経営は、採卵鶏の平均規模層の販売額と推定した3億円を超える経営が62%と3分の2近いことは、同じケージフリー経営でも経営の存在態様が大きく異なることを意味している。

同時に、これはケージのみの経営よりも平均以上の規模経営が多いことから、一般的なケージ経営というよりも比較的大規模なケージ経営においてケージフリー生産も行われていることを意味するのかもしれない。但しこの点は、捕捉率の低さ（21.8%）故に、今後の研究課題である。

ケージフリーのみの経営は、1000万円未満が30%、1000万～5000万円が40%、5000万～1億円未満が15%と、概ね家族的な経営でケージフリーを生産されていると思われる。

ちなみに、各経営の販売額を推測してみよう。販売額範囲の中央値をとり、最上位レンジは10億円、最下層レンジは1000万円とし、回答数で除すると以下のように平均販売額を推測できる。

ケージフリー経営6650万円、ケージ経営4億7300万円、並行生産経営5億6800万円となる。並行生産経営の経営規模の大きさとケージフリー経営の家族的な様子が推察できる。

表28 過去1年間の農畜産物の販売金額（売上高）について該当するもの1つに○を記入してください。
販売金額には、売上金額を記入してください。（肥料代、農薬代などの経費を抜かない）

		ケージ経営		CFのみ経営		並行生産経営		CF5千羽以上経営	
		64	100%	53	100%	21	100%	31	100%
販売なし		4	6%	0	0%	0	0%	0	0%
販売あり	1000万円未満	1	2%	16	30%	0	0%	0	0%
	1000～5000万円未満	3	5%	21	40%	0	0%	2	6%
	5000万円～1億円未満	4	6%	8	15%	2	10%	7	23%
	1億円～3億円未満	19	30%	5	9%	5	24%	7	23%
	3億円～5億円未満	5	8%	0	0%	3	14%	3	10%
	5億円～10億円未満	10	16%	0	0%	4	19%	3	10%
	10億円以上	14	22%	1	2%	6	29%	7	23%

6-2 関連事業販売金額

次に、関連事業の販売金額を聞いた。これは、営農類型別経営統計で、2021年分まで聞いていた直接販売額に相当する部分の動向を把握する趣旨で、生産だけでなくそれを直接消費者等に販売したり、加工品として販売するという6次産業化の動向を把握する一環である。

- ① 加工等関連事業販売金額が1億円以上の構成比は、ケージ経営31%、並行生産経営52%、ケージフリー経営6%である。
- ② その一方で、加工等関連事業販売金額が「売上なし」も、ケージ経営20%、並行生産経営10%、ケージフリー経営21%ある。
- ③ 前頁で平均販売額規模（推測値）の1割程度以上の金額で関連事業販売金額のある経営は、ケージフリー経営で42%（関連販売500万円以上）、ケージ経営で36%（関連販売5千万円以上）、並行生産経営で62%（関連販売5千万円以上）である。

営農類型別経営統計による「直接販売収入」（2019年～2021年平均）で見ると、3万羽未満層における、直接販売収入比率（畜産物収入／直接販売収入）は、3万羽未満層で7割を超え、3～5万羽層の3割、5万羽以上層の4割を大きく超えている。経営統計における3万羽未満層は、平均1万羽以下である為、小規模層ほど直接販売に依存する比率が高いということが言えそうである。ただし、その直接販売が何を意味するかは不明である。経営統計では、自営直売所などと共に、小売業・食品製造業・外食産業などの実需者も含まれているからである。

今回、ケージフリー経営で関連事業販売金額が経営にどのように影響しているのか、ケージフリー経営の加工を含む類型化によりケージフリー生産の存立構造・発展可能性を検討していく必要がある。

表29 過去1年間の鶏卵に関連した加工等売上金額の合計について、該当する欄に○を記入してください（農業生産関連事業は、鶏卵の加工、直売店、通信販売など、関連商品・仕入商品を含む）

	ケージ経営		CFのみ経営		並行生産経営		CF5千羽以上経営		
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	
売上なし	13	20%	11	21%	2	10%	4	13%	
売上あり	100万円未満	2	3%	4	8%	1	5%	0	0%
	100万円～500万円未満	5	8%	10	19%	0	0%	1	3%
	500万円～1,000万円未満	4	6%	6	11%	0	0%	2	6%
	1,000万円～5,000万円未満	5	8%	10	19%	4	19%	5	16%
	5,000万円～1億円未満	3	5%	3	6%	2	10%	3	10%
	1～10億円未満	11	17%	3	6%	7	33%	7	23%
10億円以上	9	14%	0	0%	4	19%	4	13%	

6-3 農畜産物販売金額と関連事業販売金額の関係

6-1, 6-2に基づいて、農畜産物販売とその加工等関連事業等販売の関連性をみるために、経営タイプ毎に、縦軸に農畜産物販売金額を取り横軸に加工等関連事業販売金額を取って該当するマスに、階層規模毎の記号によって各経営をプロットしたものが、下記の3つの図である。

図からわかるように、加工等事業を行っていない経営がある一方、鶏卵販売額に匹敵する加工事業等を行う経営もある可能性が示されている。

また、ケージ経営で比較的大規模な経営ながらも「販売なし」という回答があることは、大手経営の子会社の存在なのかもしれない。

採卵養鶏業の存立を、経営タイプ・経営規模毎に類型化することでその構造を明かにすることが、ケージフリー経営の存立可能性や発展課題を明かにする上で欠かせない。

図2 ケージ経営：農畜産物販売金額（縦）と鶏卵関連加工等販売額（横）の関係（回答52）

○：C50万羽以上層、△：C10万～50万羽層、□：C～10万羽未満、記号の数は経営数

	鶏卵加工等販売額								
	なし	～100万円未満	100～500万円未満	500万～1000万円未満	1000万～5000万円未満	5000万～1億円未満	1億～10億円未満	10億円以上	
農畜産物販売額	10億円以上	○○		○				○○△	○○○△△ △△
	5億円～10億円	○△△ △△				△	□	△△	
	3億円～5億円未満	△		△		△	□		
	1億円～3億円未満	□□□	□	□□	□□□	△□	□	△△□□	
	5000万円～1億円未満			□	□		□		
	1000～5000万円未満	□□				□			
	～1000万円未満							□	
	なし		△						△△

図3 ケージフリーのみの経営：農畜産物販売金額（縦）と鶏卵関連加工等販売額（横）の関係（回答46）

○：CF1万羽以上層、△：CF5千～1万羽層、□：CF1千～5千羽未満、≡：CF～1000羽 記号の数は経営数

		鶏卵加工等販売額							
		なし	～100万円未満	100～500万円未満	500万～1000万円未満	1000万～5000万円未満	5000万～1億円未満	1億～10億円未満	10億円以上
農畜産物販売額	10億円以上				○				
	5億円～10億円								
	3億円～5億円未満								
	1億円～3億円未満				○	△		△△	
	5000万円～1億円未満	○△		△			○△□		
	1000～5000万円未満	□□□□ □≡	□□	□□□≡ ≡	≡	○△□□□≡		□	
	～1000万円未満	□≡≡	≡≡	□≡≡≡	≡≡≡	□≡≡			
	なし								

図4 並行生産経営：農畜産物販売金額（縦）と鶏卵関連加工等販売額（横）の関係（回答26）

○：CF5万羽以上層、△：CF1万～5万羽層、□：CF5千～1万羽未満、記号の数は経営数

		鶏卵加工等販売額							
		なし	～100万円未満	100～500万円未満	500万～1000万円未満	1000万～5000万円未満	5000万～1億円未満	1億～10億円未満	10億円以上
農畜産物販売額	10億円以上					△		△□	○○○
	5億円～10億円						△	△	○
	3億円～5億円未満	□			○	△□			
	1億円～3億円未満	□			△	□		△□	□
	5000万円～1億円未満	△□		□			△□		
	1000～5000万円未満								
	～1000万円未満								
	なし								

7 まとめ

7-1 調査結果のまとめ

アンケート調査結果から、ケージフリーの羽数構成比率3.17%は、現実のケージフリー比率よりも高めに出ている可能性があると思われる。(①成鶏羽数の21.7%という捕捉率、②回収票の規模別構成比(対農水省調査及びセンサスからみた)の偏り、③1000羽未満層の回収数、④大手ケージ経営の未回答、⑥ケージフリー経営の未回答、等)

とはいえ、調査結果を整理すると、以下のような推測が可能である。

- ① 日本のケージフリー採卵鶏は、ケージとケージフリーを両方生産する経営によって多くが飼養されている。しかしケージフリー実施経営数は、ケージフリーのみの経営がより多いと思われる。
- ② ケージフリーの飼養スペース・必要な設備に関しては概ねEU基準をふまえて整備・設置されている。しかしそれぞれの施設の適切性は問うていないため、次に適切性を聞く必要がある。
- ③ ケージフリーの経営課題の中心は販売価格と販路の確保、そして労働時間の増加である。これは、ケージフリーのみか並行生産かを問わず、ケージフリーの規模を問わない。よってケージフリー鶏卵市場には引き続き基本的な困難ないし不安があることを意味する。適切なケージフリー鶏卵市場形成のためには、ケージフリーの定義や基準設定などにより一定水準のケージフリー卵を保証する標準化が求められる。
- ④ ケージフリーの技術課題も共通である。つつきの発生、巢外卵のとり扱い、農場の整備の大変さ、基準のないこと、1羽当たり生産卵数の少なさ等が指摘されている。ケージフリー技術体系を考えるには、どのような生産方法・形態をケージフリー生産とするのかその範囲を設定し、示すことで改善技術研究も取り組みやすくなり、それを支える政策・予算なども検討しやすくなる。
- ⑤ 経営・技術課題はあるとしても、ケージフリーを実施している経営において、ケージフリー生産の拡大意欲がある。これは、採卵鶏経営全体の拡大意欲と比較してより拡大志向が強い。社会的ニーズの高まりを理由に挙げる経営も少なくないことから、潜在的なケージフリー卵の不足状況があると考えられる。
- ⑥ ケージフリー生産経営には幾つかのタイプがあることが想像できる。その一つが、ケージ飼育部門の有無という飼養方法であり、もう一つが加工販売部門の有無という経営多角化である。(本調査では経営多角化に関する設問が少なかったため次の課題である)。前者のケージ部門の有無は、ケージフリー実施経営を2分する性格の違いが見て取れた。ケージフリーを始めた契機から、ケージフリーのみの経営は「鶏の健康等を契機とするタイプ」、ケージとケージフリーの並行生産経営は、「社会ニーズ等を契機とするタイプ」と特徴付けることが可能である。想像の範囲を出ないが、後者の「社会ニーズ対応経営」がケージフリー卵の生産量としては多くを担いつつ、「鶏の健康等契機経営」が事業先行的な畜産にたいして牽制機能を果たしながらケージフリー鶏卵市場が形成・発展していく予測図を描くことができる。

こうした予測は、経営規模の違いや、採卵養鶏の在り方に関する回答傾向からみて、採卵鶏業に携わる意味合いが重ならない部分が「並行生産経営」と「CF経営」には一定存在する、とみられたことを背景としている。

同様に、「C経営」と「CF経営」間でも重なり合わない部分が一定ありそうである。その一方で、「C経営」と「並行生産経営」ではむしろ重なり合う部分が少なくなさそうである。時系列による変化も含めて今後より解明したい。

- ⑦ ケージのみの経営は、少ないながらもケージフリーへの生産意欲を持つ経営がある。その背景には、並行生産経営がケージフリーに取り組んだ契機に類似し、社会のニーズがあると判断できれば、それに対応してケージフリーに取り組む可能性がありそうである。

- ⑧ 消費者理解をどのように進めるかは、ケージのみならずケージフリー生産経営でも強い問題意識を持っている。そもそも消費者にどのような理解が足りないのか。何を消費者に説明し、何を理解して欲しいのか？ 採卵鶏業に関する現状の理解という意味の消費者意識の形成を図る必要があると考えられる。採卵鶏業では生産現場を直接見せられないとすれば、どのように情報の透明性を確保し発信するのか？ 実は社会の課題なのかもしれない。
- ⑨ 最後に、アニマルウェルフェアの観点から 5つの自由 5つの領域 を理解するための活動は引き続き重要である。

7-2 調査結果から導かれる近未来予想

以上のまとめから導かれる論点を、近未来予想として述べる。

問い① 並行生産経営はどのようにしてケージフリーの主たる担い手になるのか。

調査結果をふまえると、近年の高卵価等を背景に新規投資資金のあるケージ経営がケージフリーに取り組むことで、並行生産経営としてケージフリー生産が普及していく可能性があると考えられる。その場合、エイビアリー方式やウインドレス鶏舎が選択されると思われるため、今後、エイビアリー方式のウインドレス鶏舎におけるケージフリー生産の技術向上が求められるようになるのではないかと。その状況下で、単層平飼いや開放鶏舎がどのようにして存在価値を示すことが可能かを技術向上や6次産業化、中間流通業の機能を含めて、ケージフリー卵同士の意味ある品質競争が不可欠となるだろう。

問い② ケージフリーの拡大意欲のもとで、ケージフリーはどの程度広がるか。その下で「ケージとケージフリーの共存」をどのように考えるか。

誤りを恐れずに述べれば以下のように考えられる。

今後のケージフリーは、ケージフリー実施経営の増羽数よりも、新規参入による並行生産経営の増加によって担われることになるだろう。そのもとで、ケージとケージフリーの共存は同一経営内での在り方として検討されることが多くなる。同時に、「CF経営」を中心としたネットワークによる質的向上の取り組みが、ケージフリーの特徴を示す意味で求められてくるだろう。

日本のケージフリーはこの先10年でどこまで増えるのかによって「ケージとケージフリーの共存」の形は変わる。仮に現在の3.17%程度から10倍の3割に増えると仮定しよう。その場合10万羽規模のエイビアリー経営が次々にできなければ3割にはならないだろう。しかしそのためにはケージフリー基準などが詳細に定まっていなければ新規投資はしにくい。残念ながらその見通しは立てにくく、よって10年で3割という方向性は想像しにくい。

だが、1割から2割であれば実現可能性はあると思われる。仮に1割としたとき、現在の成鶏羽数1億3000万羽に本調査CF比率3.17%を当てはめ、現状のCF羽数約410万羽とすれば、10%は1300万羽ゆえ、今後10年で900万羽程度、年間100万羽弱のケージフリーへの参入を想定することになる。これは厳しいながらも可能性がないとはいえない。

新規のケージフリー参入は3つのパターンが想定できる。

第一は、大きな規模のケージ経営がもう一つの柱としてエイビアリータイプを新規設置する場合である。これはコンビタイプを導入して、販売が見込めないときはケージとして使用する方法もあるため設備投資しやすい。ただしこれでは消費者への透明性の点でリスクが生じるため、通常のエイビアリー設置を選択することもあるだろう。いずれにしてもエイビアリー導入にはそれなりの販路を確保しなければならない。

第二は、社会ニーズの拡がりから、大きな規模のケージ経営が試みに単層平飼的取り組み、次いで需要が見通せるようになった時にエイビアリーに取り組むという方向である。

第三は、余り大きくないケージ経営が、一つの鶏舎等のバッテリーケージを廃棄して単層平飼い的に取り組む方向である。

この第二、第三のケースは第一のパターンより十分可能性があり、また現在進行中と考えられる。

この場合で重要なのは、比較的小ロット経営で生産されるケージフリー卵を、どのように全国津々浦々のスーパーマーケットに陳列するのかということであり、生産と消費を結ぶ集荷分荷の現実的担い手が必要となる。それは、小売だけでなく中食やレストラン、ホテル、食品企業等の需要と生産に関する情報と商流物流を担う中間流通業者の存在意義が大きいということでもある。

こうしたことが、現在の鶏卵フードシステムにおけるプレーヤーに実施可能であるのかどうかによってケージフリー鶏卵の市場拡大規模とスピードが決まる側面もあると思われる。

なお、上記の新規参入が順調に進まないときでも、現在のケージフリー実施経営の規模拡大により、1割程度までの拡大は実現できるのではないだろうか。

問い③「CF経営」を中心に、どのようにしてケージフリーのクオリティを上げられるか。

有機畜産もアニマルウェルフェア畜産も、事業成立の為には、事業優先的思考に基づく経営、生産方法が採用されがちである。そのことが本来のめざす姿と乖離していくリスクがある。このため、米国ではリアルオーガニック認証や、リジェネラティブ認証などが、いわゆる工場的な有機畜産、工場的なアニマルウェルフェアへの牽制機能を果たしていると考えられる。日本でも同様に、そうした役割を果たす組織ないしは機構が必要と思われる。ケージフリー実施経営も多様であると考えられるが、理念的なケージフリーの姿を体現しながら、工場的なケージフリーに傾きがち市場に常に問い直しを迫るような機能の担い手が登場するか否かが問われる。当然そのためには消費者理解や「消費者との協同」が関わってくる。現状ではその萌芽が見えるものの、今後の展開に期待している。

問い④ ケージフリー卵は過剰なのか不足しているのか

現状では、加工や業務用のケージフリー卵は不足しているとの声が聞かれる一方で、スーパーに並ぶケージフリー卵は不足しているのか？ この点を考えるには鶏卵全体の需給が大きく関わる。

一般的に鶏卵は価格弾力性が小さいため、不足であれば価格上昇が大きくなり国民経済に大きな問題を生む。一方、ケージ卵価格上昇は価格差が縮まりケージフリー卵が売れやすい状況となる。

鶏卵生産量は2019年度265.0万トンピークに、2023年247.8万トンまで4年連続で減少（食料需給表）し、2024年は248.1万トン（鶏卵流通統計調査）とほぼ横ばいながらも、2025年は220~230万トンと推計（日本養鶏協会、2025年3月）されている。この減少には、鳥インフルエンザの影響だけでなく猛暑の影響もあると思われるが、いずれにせよ6年連続減少傾向でピーク時と比べ40万トン程少ない生産力水準にある。

他方、2025年4月「食料・農業・農村基本計画」で鶏卵の生産目標量は2023年の248万トンから2030年の252万トンへ4万トン増加、1人当たり消費量は2023年の16.5kgから17.3kgへと増加を見込んでいる。これに輸出入を加えて需給を見通すが、2025年3月時点で日本養鶏協会は、2030年に13万トン、約4.5%過剰を見込んでいた。

問題は、現在の採卵養鶏はこのまま不足に陥るリスクはないかという点である。仮に鶏卵不足になると価格上昇を通じて鶏卵の消費減退が生じ、価格差縮小でケージフリー消費が増えたとしても卵全体の販売規模は減少するリスクもある。そして不足の解消が元の需要量まで戻るのか、消費減少の結果として縮小均衡がもたらされるのかは分からない。鶏卵需要全体が縮小均衡したときその下で産業の発展をどのように考えるか難しい。政府見通しのように、現状よりも微増（4万トン）で均衡するとしたときにその下でケージフリー生産の増加をどのように構想するのか？ 飼養法別の単価も含めて様々な検討が必要ではないか。いずれにしても全体の需給動向が、ケージフリーの市場形成にとっても重要であることはいままでもない。

7-3 残された課題

① ケージフリー生産構造の更なる解明

今回の生産実態調査を手始めに、ケージフリーの今後の展開方向を明かにするには、以下の具体的事柄を明らかにすることが急務と思われる。

- ・ケージ経営がケージフリーに取組む条件と課題
- ・ケージフリー卵の需要構造・消費者理解の促進の課題
- ・ケージフリー鶏卵の流通構造
- ・ケージフリー生産における6次産業化の役割と課題

等へのアプローチを今後行って行く必要がある。

② 鶏卵需給の短期・中長期見通しの検討とCF市場への影響

7-2の④で示したように、鶏卵は2020年頃までは過剰基調で推移してきたが、鳥インフルエンザや猛暑の影響などで、不足基調に転じる危険がある。鶏卵の需給見通しは、ケージフリーの市場の展開に大きな影響を与えることから、需給の精査は重要な研究課題である。

③ ケージフリー生産の技術発展・経営発展のためのプラットフォーム・ネットワークの情報共有

ケージフリー技術・経営発展の取組は、幾つかの組織や経営グループで進められている。こうした動きがどのようにしたら大きな力を発揮することになるのか。現在の動きから今後のケージフリー技術・経営支援の在り方を見出していく必要がある。

謝辞

調査にご協力いただいた経営の皆様には、改めて感謝申し上げます。
調査結果は、採卵鶏業とケージフリー生産の発展並びに今後の研究に活かしていきたいと存じます。
今後、ケージフリー鶏卵の流通・小売調査。
ケージフリー経営類型別事例調査。
ケージフリー採卵養鶏調査（2026年改良版）を計画しています。
引き続き御協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、調査票にメールアドレスを記載いただいた方には、既に概要版（速報版）をPDFで送信致しましたが、幾つかの宛先には届かずに戻ってきてしまいました。届かなかった方には、心よりお詫び申し上げます次第です。（この報告書をもう一度お送りします）

なお、連絡先をご記入いただいた経営の方には、引き続きご連絡・ご質問・インタビューなどさせて頂ければ幸いに存じます。

お気づきの点などございましたら、下記メールアドレス（アットマークを@に変換して下さい）までご連絡下さい。

（麻布大学 獣医学部 動物応用科学科 動物資源経済学研究室 教授 大木茂

〒252-0206 神奈川県相模原市中央区淵野辺-17-71 麻布大学1号館(獣医学部棟)213

Tel/Fax 042-769-1725 e-mail [ooki アットマーク azabu-u.ac.jp](mailto:ooki@azabu-u.ac.jp))

本報告書は科学研究費基盤研究 23K054534「アニマルウェルフェア配慮型畜産の経営的存立基盤の研究」に基づく研究成果の一部です。

本報告書は、麻布大学 HP、ラボ&ナビ、(<https://lab-navi.azabu-u.ac.jp/>) の「動物応用科学科」⇒「動物資源経済学研究室」のページにて公開しています。今後、修正などあるときは、逐次上記に公表・改訂版の掲を行います。お手数をおかけしますが、ご確認いただければ幸いです。



参考文献

Animal Rights Center (2023)、日本のケージフリー飼育の鶏の割合は 1.11%、ケージ飼育が 98.89% (2023 年調査結果)、2023.10.25 : <https://www.hopeforanimals.org/eggs/1percent-cage-free/>.

畜産技術協会 (2015)、採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書、2015.3

畜産技術協会 (2020)、アニマルウェルフェアの考え方に対応した採卵鶏の飼養管理指針 (第 5 版)、2020.3.

Eurogroup for Animals (2020), Animal Welfare and Food Labeling: Initiating the Transition Through High Quality Consumer Information.

日本養鶏協会 (2024)、(一社) 日本養鶏協会のアニマルウェルフェアに関する基本方針について、2024.6.

日本養鶏協会 (2025)、鶏卵生産等のアンケート調査結果について、2025.3.

農林水産省 (2024a)、『「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」に関する生産現場における取組状況について』「令和 5 年度に実施した試行調査の結果」、2024.6.

農林水産省 (2024b)、令和 6 年畜産統計、2024.7.

農林水産省 (2025)、「令和 6 年度「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」の取組状況に係る調査」採卵鶏の結果 (詳細版)」、2025.6.

* 農水省、畜産技術協会、日本養鶏協会の文献は、いずれも HP より PDF でダウンロード可能 (2025.8.8 参照)

資料1 アンケート調査 送り状

2025(令和7)年2月14日
麻布大学 動物資源経済学研究室 教授 木本茂

ケージフリー採卵鶏 実態調査

鳥インフルエンザの広がりが心配が拡くなく、説明を取らせてまいりました。

日本には行前でもケージフリーの実態に関する統計が存在していません。国際畜産委員会 (IHC) が2024年に公表した、日本のケージフリー比率は3.5%とこれまでの5.9%と比べ2.4%減を落としています。理由に因する説明はありません。これまでも調査回数で5~6%という数値は変動も少ないか、その変動はありましたが、とはいえず3.5%という開明も説明がないなかで引用し難いのも事実です。

採卵鶏をめぐっては、EUや米国・オーストラリアなどでケージフリー（パターリーケージやエンリッチドケージ）を使用しない）が広がりを見せています。またアジアでも、台湾・中国・韓国で、一定の基準ないし許認可準に基づき認証システムの整備しつつも単独不足等を利用して監視強化を促すケース(韓国)もあります。日本では、ケージを含んで「迅速に配慮した飼養方法」という枠組みでアニマルウェルフェア (Animal Welfare; 以下AWと略) が定められていますが、一般的な採卵鶏の公的飼養標準はなく、「動物の表示に関する公正競争規約及び施行規則」で、原則は「産卵又は採卵以外の期間を自由に調節できるように飼育する」として飼育した場合と、ある意味で「曖昧な規定」にとどまっています。

こうしたもとはケージフリーの統計的把握は極めて困難と言わざるを得ません。しかしながら、そうとばかり言っているのは、ケージフリーの適正な引当を形成・発展させることは難しいのではないのでしょうか。そこで「曖昧な規定」であっても、そのもとで日本のケージフリーがどのような方法でどの程度生産されているか把握することを目的に、このアンケートを企画しました。

本アンケートは、各種の認証取得経営をベースにインターネットで収集した約700経営を対象に、郵送で行うものです。政府の「畜産統計」(2024)によれば産卵鶏の採卵鶏産数(約1,470戸とされています)で、概ね全体の半分程度の経営を対象に調査を実施させて頂くこととなります。万が一、対象でない経営が含まれておりましたら心よりお詫言申し上げます。目的は、日本におけるケージフリー採卵鶏の実態を明らかにし、市民の食の安定と食料生産・採卵鶏養殖の発展のための判断材料を得ることにあります。是非ともご意見を御明察頂き、可能な範囲でアンケートにご回答下さいませようお願い申し上げます。

【回答期切】2月14日 既許の返信用封筒にて切手を貼らずに返信下さい(3月になっても構いません)

お聞きしたいことは以下の通りです。

- ・ケージフリー採卵鶏の形態(数産卵人・遊牧)
- ・ケージフリー養鶏の問題点(卵回収)
- ・ケージフリー養鶏の改善方法(卵回収)

結果は麻布大学HP(動物資源経済学研究室 <https://lab-nvtd.mfabu-u.ac.jp/or-10/index.html>)で御覧を立
表(2025年5~6月)し、概観を得られれば養鶏雑誌・学会等で情報発信を行なう予定です。

単位・相場の使い方
飼養スペースなどは、「㎡」以外の単位でご回答できる場合は、坪などの単位も併せてご記入下さい。
この調査では、ケージ(パターリーケージ、エンリッチドケージ、エンリッチドケージ)以外は全てケージフリー(ケージでの飼育していない)としてご回答ください。

ケージフリーは、中層平飼い(エイベアリー、コンベタイプ/ハイアットタイプのエイベアリー)を含み、放し飼(フリーレンジ)、有機(オーガニック)などもケージフリーとしてご分類したうえで、放し飼(フリーレンジ)、有機(オーガニック)などは別途算計します。

屋外採卵鶏(ケインターガーデン、ペラゴダ等)がある場合は、「屋外なし採卵鶏」と同様、「産卵外」として記載頂き、放し飼(フリーレンジ)として算計して頂きます。

放牧育ち(パステューレイズド)という用語は本調査では使用しませんが、誤い訂として各経営で定義して使
用されている場合は、質問にその規定をご記入頂ければ、区分した集計も算計します。

回答対象：

この調査は、成鶏の飼育経営を対象としています。

1つの経営(体(亦)が複数の飼養地(農場)を所有する場合は、一つにまとめてご回答ください。(問題農場・採卵鶏場における意思決定者が複数にある場合はそれら農場のデータも合わせてご回答ください)。

ただしアンケート上層自体は、別農場とは存在しますが、送付欄を設けるために、把握できた農場の大部分にお送りしてあります。

また、1つの経営(企業)が複数の飼育場を営んでいることを想定していただきますので必要最小限とケージフリー採卵鶏の問題性も把握したいと考えております。

繰り返しになりますが、アンケート発送先は、各種生産認証取得経営、あるいは無期・終期などで消された経営の名称に基づき、インターネットで住所を検索し、把握した住所(800程度の経営)などに郵送しています。本アンケートで得られた情報は、実施主体で公開し、調査報告書をもとめる目的以外では使用いたしません。また、経営データ等は上げられも知れない加工して、個別回答が分かる形でのとりまとめは致しません。

本調査は、文部科学省の科学技術政策研究の一環として実施しています。お問い合わせはメールが望ましい「ケージフリー養鶏」の実態を明らかにする目的です。

実施主体：麻布大学 獣医学部 動物資源経済学研究室 教授 木本茂

〒252-0206 神奈川県相模原市中央区鶴巻5-1-17-71

enrich@mfabu-u.ac.jp 電話 090-8722-0743 (お問い合わせはメールが望ましい)

※詳細にご意見を伺わせて頂ける場合には、調査票の空白部分に、経営者・連絡方法を記載いただければ、後
は必ずご連絡させていただきます。

※本封入の印刷用紙で本アンケート票が送られていないケースをご存じでしたら、ご連絡頂ければ送付いた
します。

資料2 アンケート調査票

ケージフリー採卵養鶏 実態調査 調査票

1. 飼養方法 以下、指定しない限り成鶏に限定してお聞きします(すべての方にお聞きます)

以下の飼養方法について、行っているものにすべて○を付けてください。

①鶏舎外	鶏舎内	エンリッチドケージ	エンリッチドケージ
②鶏舎内	バタリーケージ	エイブアリー (コンビタイプ)	単層平飼い
	屋根付き飼育場	屋根なし飼育場	
	エイブアリー		

2. 2では、ケージフリー飼育をしている方に、飼育方法をお聞きます

③鶏舎内	外敵から守るシェルター	日陰を作る木など	水飲み場	屋根無飼育場 (ついでに材料有)
	屋根付き飼育場 (敷料有)	屋根付き飼育場 (ついでに材料有)	その他 ()	
④鶏舎内	巣箱	敷料	砂浴びエリア	止まり木
	ついでに材料	飼料槽など	給水器など	爪とぎ

2-2 ピークトリミングの実施について (ケージフリーの鶏)

⑤ピークトリミングは生後何回実施していますか	0, 1, 2, 3, 4
⑥生後150日以降のトリミングは行っていますか	はい・いいえ

2-3 換羽について (ケージフリーの鶏)

⑦強制換羽 (もしくは自然換羽) を行っていますか	はい・いいえ
⑧換羽する鶏は平均して何日令まで飼育しますか	650日前後・700日前後・750日前後・800日前後

2-4 ケージフリーで飼育している品種をお知らせください (複数ある場合はすべてお聞きます)

ケージフリーの飼養品種	年～
-------------	----

3ではケージフリー生産を行っている方にお聞きします

3 ケージフリーの現状と課題

3-1 ⑩ケージフリーの飼育はいつ頃から始めましたか

3-2 ⑪ケージフリーを始めた理由は何ですか (4つ選んでください)

- A: 付加価値販売のため
- B: 鶏舎の有効活用のため
- C: 労働力の有効活用のため
- D: 社会・取引先のニーズ
- E: 世界の動向を見て
- F: 鶏の福祉のため
- G: 卵の栄養・おいしさを向上のため
- H: 卵・経営のイメージアップのため
- I: 鶏の健康増進のため
- J: 鶏の免疫向上のため
- K: その他 (具体的に)

3-3 ⑫ケージフリーの飼養方法はどのようにして学びましたか(上位2つ選んでください)

- A: 独学 (書籍、見学、検索など)
- B: 実践している経営者への訪問やインタビュー
- C: かつてケージフリーをしていた方からの伝聞
- D: 取引業者 (流通・資材等) などのアドバイス
- E: その他 (具体的に)

3-4 ⑬ケージフリー生産の技術的課題は何ですか。最も苦勞/気にしている点 (苦勞すると思われる点) をご記入下さい

3-5 ⑭⑮⑯と重なりませんが、全体の傾向を把握するためにお聞きします
ケージフリーでの生産の技術的課題は何ですか (主要な課題を4つ選んでください)

- A: 死亡率の高さ
- B: つつきやいじめの発現の多さ
- C: コクシジウムをはじめとする病気の発生リスク
- D: ワクモをはじめとする害虫のリスク
- E: 糞尿処理の大変さ
- F: 飲料などの整備の大変さ
- G: 巢外卵の多さ
- H: 汚卵の多さ
- I: 粉塵や糞害排除の大変さ
- J: 日本のケージフリー生産基準が公的に定められていないこと
- K: ケージフリー用に育雛する業者がみあたらない
- L: その他 (具体的に)

3-6 ⑰ ケージフリー生産の「経営」的課題は何ですか。最も苦勞/気にしている点 (苦勞すると思われる点) をご記入下さい

3-7 ⑱⑲と重なりませんが、全体の傾向を把握するためにお聞きします
ケージフリー生産の「経営」的課題は何ですか(主な課題を5つをえらんでください)

- A: 販売先の開拓
- B: 販売価格
- C: ケージフリー卵として販売できる割合の少なさ
- D: ケージフリーだけでは付加価値が付きにくいこと
- E: ケージフリーのための設備投資の償却費用の大きさ
- F: ケージフリー生産による1羽当たりの飼料効率の低下
- G: ケージフリー生産による労働時間の増加
- H: ケージフリー生産による労働環境の悪化
- I: 産卵率の低下
- J: 商品化率の低下
- K: 加工向け販売に際して、ケージと同価格での取引となりがち
- L: チューブルエッグとして販売する際の卵・小売の取引条件が厳しい
- M: その他

4 4では皆さんにお聞きします

4 ケージフリー「基準」についての意見

4-1 ⑳採卵養鶏のあり方に関して、米国では州によってケージフリーを最低基準としている州がありますが、日本ではケージフリーを最低基準とする州についてどのようにお考えですか (賛成する意見にすべて○を付けてください)

- A: バタリーケージ生産を基本とすべき
- B: エンリッチドケージを基本とすべき
- C: ケージフリー生産を基本とすべき
- D: エンリッチドケージを最低基準とすべき
- E: ケージフリーを最低基準とすべき
- F: 開放鶏舎を基本とすべき
- G: ウェイドレス (セミウェイトドレス) 鶏舎を基本とすべき
- H: 止まり木や巣箱などの付帯設備を設置することを基本とすべき
- I: 1羽当たり最低面積基準を設けるべき (屋内)
- J: 1羽当たり最低面積基準を設けるべき (屋外)
- K: コンビタイプエイブアリーはケージに区分すべき
- L: その他 ()

4-2 ㉑採卵養鶏のあり方について4-1以外に具体的なお考えをお聞かせください

2025 年 麻布大学「ケージフリー採卵養鶏調査」報告書

発行 2025 年 8 月 12 日 第 1 版
発行者 麻布大学 獣医学部 動物応用科学科
動物資源経済学研究室
〒252-0206 神奈川県相模原市中央区
淵野辺 1-17-71 1 号館 213

*研究室ホームページ（麻布大学ラボ×ナビ：動物資源経済学研究室
<https://lab-navi.azabu-u.ac.jp/va-10/index.html> ）